第5章

知識はただの作りごとか？

knowledge3.indd 243 2017/04/07 21:10:00

知識を多く持つことは良いことなのだと、なんの疑問も持たずにそう思っている人がいる。日本という社会には、知識に対する盲目の信仰がある。知識を多く持つ人は、なぜか自分の能力を過信し、知性や品性が自分に備わっていると思い込み、知識を持たない人を見下す。でもそれは、ただの考え違いでしかない。

文化を異にすれば、そして言語を異にすれば、持つ知識は当然異なる。お互いのことをわかるには、二つ以上の文化を持ち、二つ以上の言語を話す必要があるが、日本の社会では、二つ以上の文化を持ち、二つ以上の言語を話すことは、ハンディキャップでしかない。なぜ日本では、コミュニケーションが重要だと思われないのだろう。

国家が定めた教育制度により、学校は画一的な知識を与え続ける。知識を授けるのは国家に養成された教員たち。そのおかげもあって、社会は同じ知識を持つ人でいっぱいになる。それは、グローバルな社会においての弊害でしかなく、隣国の別の画一的な知識を持つ人たちとの対立につながる。

宗教の知識も科学の知識も、それを信じる人には大きな意味を持つが、その枠の外にいれば、なんの意味も持たない。知識などと言ってみても、所詮、幻想でしかない。そのことを確認することも必要だと思う。

knowledge3.indd 244 2017/04/07 21:10:00

5・1　知識と知性・品性

知識は、知性や品性にどんな影響を与えるのだろうか。知性や品性は、どんな知識を選び取るのだろうか。

知識と知性

為末大が、知識と知性のことを書いている。わからないことがあっても検索すれば大体のことがわかってしまう時代になって、知識と知性のことを改めて考えざるを得なくなったという感じだ。

為末は面白い話をする。

ロシア人「自由民主党と民主自由党の違いは何か？」
通訳　「自由民主党と民主自由党の違いは何か？」
日本人　「カレーライスとライスカレーの違いのようなものだ」
通訳　「ハムエッグとエッグハムのようなものです」

この通訳が瞬時にしたことは、神業だ。カレーライスもライスカレーも知らない人に、ちゃんと答えを伝えているのだ。ふわっとした概念を捉え、それを相手にわかるような表現で伝える。しかもそれを瞬時に行う。これを知性と呼ばずして、なにが知性だろう。

為末がいいことを言っているので、それをそのまま引用したい。

knowledge3.indd　245　2017/04/07　21:10:00

言葉ではなく関係性を検索したい時一体どうすればいいのだろうか。またはまだ言語化されていない抽象的な概念はどう検索すればいいのだろうか。私は何を記憶するかというよりも、どう記憶するかの方が重要だと考えていて、その記憶の仕方が多様であればあるほど、また普通とは違う捉え方をしていればいるほど、発想がユニークに広がると考えている。検索すれば大方の情報は出てくるが一体何をどう検索するかの方が重要ではないか。

インターネットにより知りたいことはなんでも調べられるようになったが、皮肉な事に一体自分が何を知らないで、何を知ろうとしているのかは未だ私たち側の問題として残っている。まだ言葉になっていない何かについて思いを馳せるような知性を求めていたい。

為末の言葉に足すことはなにもない。

知識と品性

パトリック・シャパット（Patrick Chappatte）の一コマ漫画のなかで、死刑を執行されようとしている人が「私は無実だ（I am innocent!）」と叫び、目隠しをした法の番人が「私はなにも聞こえない（I am deaf!）」と言う。ガラス越しに死刑執行を見届けようとする人の後ろには国旗が掲げられ、その脇には「私たちは神を信じる（In God we trust）」をもじって「私たちは死刑を信じる（In death penalty we trust）」と書いてある。

死刑廃止が世界の流れだということは、日本やサウジアラビアや北朝鮮には通用しない。

瀬戸内寂聴が「人間が人間の罪を決めることは難しい」、「日本が死刑制度をまだ続けていることは恥ずか

knowledge3.indd 246 2017/04/07 21:10:00

しい」、「人間が人間を殺すことは一番野蛮なこと」、「みなさん頑張って『殺さない』ってことを大きな声で唱えてください」、「そして、殺したがるばかどもと戦ってください」と言ったら、「被害者の気持ちを踏みにじる言葉だ」、「人の気持ちが分からない方だ」、「まず、被害者や遺族をひどい目に遭わせたばかどもがいますけど、それにはノータッチですか?」などとたくさんの批判を浴びた。

瀬戸内が言ったことは海外では当たり前のことなのだが、日本は違う。なにしろ「死んだ被害者の気持ちを考えろ」などとわけのわからないことを言う人の多い国であり、「死んだ人に気持ちなんてあるわけがない」などと言うことのできない社会なのだ。遺族の心情がなによりも大事にされ、現行の死刑制度が欠点だらけで間違いを起こしやすいことも、人は誰でも間違いをするということも、忘れられてしまう。

瀬戸内が「お心を傷つけた方々には、心底お詫びします」と謝罪したことでわかる通り、日本では多くの人が死刑制度の存続を願っていて、それを止めるというコンセンサスはないのだ。

ただ反応するだけ

ツイナビに、ボット（bot）のことが書いてある。ボットとはTwitterの機能を使って作られた機械による自動発言システム。語源はロボットから来ている。特定の時間に自動ツイートするボット、ユーザーのボット宛の発言に返答するボット、特定のキーワードに反応するボットなど、様々なボットが存在する。でもボットはただ反応するだけ。知性も品性もない。

でもよく考えてみれば、私たちの多くは、例えばツイッターのユーザーは、ただ反応しているだけなのではないか。

knowledge3.indd 247 2017/04/07 21:10:00

理解できる人と理解できない人

前にも書いたが、ガールスカウト日本連盟にはジュリエット・ゴードン・ロー（Juliette Gordon Low）の「知るは理解を、理解は愛を」という言葉が伝わっている。木村みゆきはこの言葉を、「知るだけでは理解できない。理解だけでは愛する事はできない」と説明している。そして、「そこに能動的に生きる姿勢がなければ、何も始まらない」という。

ゴードン・ローや木村に逆らうわけではないが、「知ること」と「理解すること」は必ずしもつながらない。世の中には知るだけでいいことがたくさんある。「昨日二人が会っていたことを知る」とか、「次の会合の日にちを知る」というような場合、理解することなどなにもない。知ることがすべてなのだ。「あの人を知っている」「その場所を知っている」「その単語を知っている」などなど、知っているかいないかということは意外に多い。規則の多くは知っていればいいのだし、定理、定義、情報なども理解せずにいてもあまり困らない。

もちろん、理解しなければならないこともある。ものごとの本質とか、理論、一般化といったことは、理解しなければ知っていることにはならない。そういうことについては、知るだけではなく理解しなければ、意味がない。また、知るだけではなく、やらなければ意味がないこともある。どうやってボールを蹴るかとか、どうやって滑るかというようなことは、実際にやらなければわからない。ただここで注意したいのは、「理解すること」と「やること」が、まったく違うということだ。

さて、「理解すること」と「愛すること」はどうだろう。私はガールスカウトではないので、その二つがどうしても結びつかないのだが、私が変なのだろうか。理解と愛のあいだには、なにか関係があるのだろうか。

ゴードン・ローは、「今日したことが明日には歴史になる。私たちは歴史を刻んでいるのだ」なんていう

knowledge3.indd 248 2017/04/07 21:10:00

ことを、普通に書いてしまう人だ。私に理解できたら、そのほうがおかしい。

人間には二種類ある。理解できる人と、理解できない人。理解できない人のことを理解しようとするのは、やめよう。

今、思い出したのだが、西田幾多郎も私には理解できない。西田は「我々が物を愛するというのは、自己をすてて他に一致するの謂である」という。少し長くなるが、引用を続ける。「自他合一、その間一点の間隙なくして始めて真の愛情が起るのである。斯の如く知と愛とは同一の精神作用である。それで物を知るにはこれを愛せねばならず、物を愛するのはこれを知らねばならぬ。しかし愛は知の結果、知は愛の結果というように、この両作用を分けて考えては未だ愛と知の真相を得た者ではない。知は愛、愛は知である。愛は実在の本体を捕捉する力である。物の最も深き知識である。愛は知の極点である」という文章は、私には理解できない。

考えてみれば、ゴードン・ローの「知るは理解を、理解は愛を」と、西田の「愛は物の最も深き知識である」は、よく似ている。事実として理解できないのだが、「理解したくもない」と思っている自分もいる。ただ単純に理解できないのか、「理解したくもない」と思っているから理解できないのか、それは自分でもわからない。

良い、悪い、正しい、誤っている

ロベルタ・ネス（Roberta Ness）が、「良い（good）」「悪い（bad）」と「正しい（right）」「誤っている（wrong）」の組み合わせを考えるなかで、「良い」と「正しい」を、そして「悪い」と「誤っている」を区別することがとても重要だという。

knowledge3.indd 249 2017/04/07 21:10:00

あたりまえだけれど、「良くて、正しい」と「悪くて、誤っている」はわかりやすい。「悪いのだが、正しい」も私たちの周りにはたくさんあり、わかりにくくはない。問題は「良くて、誤っている」だ。

ネスは「ホルモン補充療法（hormone replacement therapy (HRT)）」のことを例にとって、「良くて、誤っている」について論考している。これが私にはわからない。わかりたくもない。

ホルモン補充療法は、更年期の女性にみられる「ほてり」や「性的欲求の減退」、「肌の乾燥」などの症状を、女性ホルモンを用いて治療するものだが、副作用をめぐってまったく違う調査結果が発表され、この治療に反対する医師と賛成する医師とが、各国の所管官庁を巻き込んで、何十年にもわたり論争を繰り広げてきた。反対する医師が乳がんなどのリスクを指摘し治療の中止を勧めるのに対し、賛成する医師は副作用がまったくないという立場から治療を勧めている。反対する医師と賛成する医師が合意に至ることは、まずない。

そもそも「ホルモンが減ったとき、それを補充する」ということ自体、良いと思う人と悪いと思う人とで意見が分かれてしまう。年を取ればホルモンが減っていくのが自然だと思う人は、ホルモンの補充は自然に逆らうこと、つまり悪いことだという。一方、女性ホルモンは本来女性の体にあるべきだと自然だと思う人は、ホルモンの補充は自然の体を取り戻すこと、つまり良いことだという。

良い・悪いと、正しい・誤っているは、人によって違い、社会によって違い、時代によっても違う。そんなことはわかっていた。でも今は、わかっているだけではすまないという現実がある。グローバリゼーションのせいで、良い・悪いとか、正しい・誤っているということの基準が違う人に接する機会が増え、自分の基準が揺らいでしまう。しかも変化のスピードがとても速いから、自分にとっての良い・悪いも、正しい・誤っているも、コロコロと変わる。もう誰も、良い・悪いとか、正しい・誤っているということについて、確固とした信念など持つことができない。

knowledge3.indd 250 2017/04/07 21:10:00

機会の平等と結果の平等

インターネット上で様々な人が、機会の平等（equal opportunity）と結果の平等（elquality of outcome）の違いを説明している。機会の平等は、すべての人に等しく挑戦の機会が与えられ、各人が自分の力で挑戦し、成功を享受し、失敗の責任を負うこと。結果の平等は、すべての人が等しくなにかを持てることを目指し、成果は分かち合い、失敗したら互いに助けあうこと。どちらも理想ではあるが、目指すことは大事だという。

人によって体力が違い、知力が違い、健康状態が違い、精神状態が違う。性別が違い、年齢が違い、国籍が違い、話す言葉が違う。宗教観が違い、価値観が違い、道徳観が違い、倫理観が違う。持っている財産が違い、受けた教育が違い、性的な嗜好が違い、政治的な志向が違う。住んでいる場所が違い、家族の状況が違い、食べているものが違い、飲んでいるものが違う。好きな音楽が違い、好きなスポーツが違い、好きな時間のすごし方が違い、好きな風景が違う。見るテレビが違い、読む新聞が違い、インターネットでクリックするところが違い、得る情報が違う。知識が違い、経験が違い、目的が違い、夢が違う。感性が違い、品性が違い、知能が違い、知性が違う。仕事が違い、役割が違い、責任が違い、成果が違う。これが違い、あれが違い、なにかが違い、なにもかもが違う。それでいて、なにが平等だろう。どんな平等を目指せばいいのか。

機会の平等といったって、受け継いだ遺伝子が違い、受けた教育が違い、生活環境が違い、要するに生まれたときからなにもかもが違うのに、なにが挑戦だ、なにが夢だ、なにが成功だ。

機会の平等を声高に説く人は、結果の平等を不平等だといい、結果の平等を望む人は、機会の平等を不平等だという。言ってしまえば、どちらも正しい。機会の平等も結果の平等も、どちらも不平等なのだ。不平等を目指すわけにはいかない。

knowledge3.indd 251 2017/04/07 21:10:00

人の薦めに従う

山崎努が「救いようのない悪人を主人公に据えたシェイクスピア劇『リチャード三世』は、いつ上演してもなべて当たる」という。山崎はその理由を、醜男が劣等感をバネにひたすら悪に徹し、一途に突き進む様は文句なしに爽快で、観客の共感をよぶからだと説明する。

その山崎が、松田哲夫編の『中学生までに読んでおきたい日本文学① 悪人の物語』を薦めている。「悪」をテーマにした、詩、小説、エッセイ等のアンソロジーで、どれも教科書には入りにくい作品だという。小学生、中学生は「不道徳」や「悪事」に特別強い関心を持っている。だが公的にはそうしたマイナーな視線は目かくしされてしまう。結果一人でせっせとその手の映画や書籍を漁ることになる。

「それでいい」と山崎は言う。「かく言う後期高齢者の、すでに彼らのじいさんの年齢である僕も、未だにそっちの方面に惹かれ、あれこれ漁り続けている」というのだからたまらない。そんな貴重な本なら、読まないわけにはいかない。そう思って、書店に急ぐ。

誰かが薦めた本は、びっくりするほど「当たり」が多い。ただ冷静に考えてみれば、それはびっくりでもなんでもない。その本を薦めた文章に惹かれている時点で、もうその本が「当たり」なのは間違いないのだ。そもそも私にとって「はずれ」の本ならば、その本を薦めた文章に惹かれたりはしない。

こういう知識は意外に大事だ。「あの映画は面白い」とか「あそこの料理はおいしい」というようなことも、それを薦めている文章に惹かれたのなら「当たり」は間違いない。もしそれを薦めている人のことが好きなのなら「大当たり」。人の薦めには従ったほうがいい。

knowledge3.indd 252 2017/04/07 21:10:00

知識と倫理

日本看護協会のウェブページに「倫理と道徳はどのように異なるか」という素朴な疑問が載っていた。国語辞書で「倫理」を引くと「人として守り行うべき道。善悪・正邪の判断において普遍的な規準となるもの」「道徳。モラル」などと示されており、「道徳」を引くと「人のふみ行うべき道」「ある社会で、人々がそれによって善悪・正邪を判断し、正しく行為するための規範の総体」などと示されているように、辞書上ではほぼ同義とされており、一般的にもその解釈が用いられているという。

その上で、「道徳が個人や家族などの小集団に用いられることが多いのに対し、倫理は個々人の関係から社会に至るまでより広範に用いられることが多い」ので、「道徳は日常生活における行動の基準にはなっても、医療現場における治療の方向性などの判断基準にはなり得ないことが多い」とし、なぜ「医療道徳」ではなく「医療倫理」という言葉が用いられるのかを説明している。

実は、明治時代に西洋の考え方が輸入されるなかで、倫理という言葉が「エシックス（ethics）」の訳として用いられ、また道徳という言葉が「モラル（moral）」とか「モラリティー（morality）」の訳として用いられるようになったという経緯がある。その経緯を考えれば、「メディカル・エシックス（ethics）」の訳は「医療倫理」になる。

「人のふみ行なうべき道」という「倫理」という言葉のもともとの意味や、老子道徳経から延々と続いてきた「道徳」という言葉の意味は、今の日本にはもうない。その辺の事情は、明治時代に外国語の訳として急に広く使われ出した「人権」「情報」「知識」などの言葉と同じだ。明治時代にドイツから入ってきた言葉と、アメリカやイギリスから入ってきた言葉、それにフランスから入ってきた言葉が日本語になって、大変だったのだなあと、今更ながら思う。

knowledge3.indd　253　2017/04/07　21:10:00

だからといって、明治時代の輸入したての倫理や道徳に固執することもないし、昭和初期の歪んだ倫理や道徳を持ち出すこともない。グローバリゼーションのなかで必要な倫理や道徳を持てばいいという、それだけのことだ。

ゲイナーボラード（Gaynor Borade）は「倫理は社会システムの働きを決定づけ、道徳は私たちの性格を定義づける」という。その上で、国家、社会、職場の倫理は、グループのひとりひとりが採用し遵守している抽象的な道徳に基づいているという。当然ながら倫理にはひとりひとりが従わなければならない。それに対し道徳は、個人の選択、信念、宗教に依存しており、ある人にとって正しいことが、他の人にとっては間違ったことだったりする。さらに言えば、倫理的に正しいことでも、道徳的には間違っているということがありうる。

倫理の適用は比較的厳しくなるが、倫理に従うのは比較的簡単だ。道徳的なジレンマはあるかもしれないが、倫理的なジレンマはない。道徳はその人にとっての正しい行動に繋がるし、倫理は多くの人のガイドラインとして機能する。道徳は個人的なものだが、倫理は社会に適用され遵守される。倫理と道徳は、明らかに違う。

話は変わるが、フレデリック・トゥーロン（Frédéric Teulon）の経済と倫理・道徳の関係を書いた文章が興味深い。「経済は科学だという人がいるが、経済が科学なら、倫理・道徳のことは問題にならないはずだ」と言う。実際、分子の組成が倫理的原則に従うかとか、素粒子物理学が道徳的であるかというようなことが、問題になることはない。経済と倫理・道徳の関係が問題になるということは、経済が科学ではないということの何よりの証拠ではないか。トゥーロンはそう言う。

でも、と私は言いたい。原爆をはじめ、ありとあらゆる戦争の道具を作るとき、また、他人の研究を盗ん

knowledge3.indd 254 2017/04/07 21:10:00

だり、研究結果をねつ造したりするとき、科学者の道徳が問われるのではないか。科学の知識は何のためにあるのかと考えたとき、そしてまた遺伝子の操作や生殖の管理を許すとき、社会の倫理が問われるのではないか。科学こそ、道徳や倫理を考えなければならない分野なのではないだろうか。

科学と道徳・倫理のことはともかくとして、トゥーロンはある種の道徳がなければ経済は機能しないという。では倫理はどうか。アマルティア・セン（Amartya Sen）の『倫理と経済について（On Ethics and Economics）』は、倫理と経済の関わりを考えさせる面白い本だ。経済が政治に関連した二つの起源をもっているといい、そのひとつは倫理、もうひとつはエンジニアリングだったという。

近代に入り、経済は大きく変わる。エンジニアリング的アプローチだけが協調され、倫理的アプローチは忘れられたかのようだ。センは、人間の行動や判断を形づくる倫理的な考えに、より大きなより明確な注意を払えば、経済はもっと実りのあるものになるという。

しかし現実は、センが思い描くようにはならない。経済はますます倫理から遠ざかり、誰もが自分の利益だけを考え、経済活動は勝ち負けのゲームになってしまっている。アダム・スミス（Adam Smith）が書いた「見えざる手（invisible hand）」はもう幻想でしかなく、豊かなものはますます豊かになり、貧しいものはますます貧しくなる。

１９６８年に、ロバート・マートン（Robert K. Merton）は、「条件に恵まれた研究者は、優れた業績を挙げることで、さらに条件に恵まれる」と指摘した。実際、無名の科学者の論文はたとえ素晴らしいものでも学術誌に受理されにくく、著名な科学者による論文はすぐに承認される。マートンはこのことを、マタイ伝第13章12節の「持っている人は与えられていよいよ豊かになるが、持っていない人は持っているものまでも取り上げられる」という一節に似ているとして、「マタイ効果（Matthew effect）」と呼んだ。

knowledge3.indd 255 2017/04/07 21:10:00

マタイ効果は、カネのことにぴったり当てはまる。「豊かなものはますます豊かになり、貧しいものはますます貧しくなる」という今の状況は、まさにマタイ効果だ。貧富の差は確かに問題だけれど、政治によって「豊かな人からカネを取り、貧しい人に分け与える」という再分配だってできる。そしてカネによる格差は、ひとりひとりが意識を高めることで確実に縮めることができる。

マタイ効果は、知識のことにもあてはまる。知識の豊かなところには知識が集まり、知識の少ないところには知識はほとんど来ない。知識を多く持てる人と、知識を少ししか持てない人がいて、その差は埋まらない。しかもカネと違って、知識は再分配できない。知識豊かな人はいつまでも知識豊かで、無知な人はいつまでも無知。こんな不公平なことはないが、知識による格差はなにをしても縮まらない。

私たちは今、知識豊かな人たちによい社会、つまり無知な人にはつらい社会を作ろうとしている。無知な人たちは新しいゲームに参加できず、グローバルな競争の外に置かれてしまう。

ひとりひとりの知識は本来、同じほうを向いてはいない。以前は、芸術の知識のベクトルとカネの知識のベクトルが交わることは、絶対になかった。それが今は、芸術の知識とカネの知識は同じほうを向く。それだけではない。科学の知識とカネの知識も、軍事の知識とカネの知識も、同じほうを向く。要するにすべての知識がカネの知識と同じほうを向き、悪臭を放つ。

経済におけるセンのような人が知識においても現れて、「倫理と知識について」なんていう話をしたらいいのだけれど、そんな人は現れない。たとえ現れたとしても、誰もその人の言うことには耳を貸さない。

カネと同じベクトルを持つありとあらゆる知識は、一部の人のものになり、大多数の人たちは無知のなかに追いやられる。そんな未来は、そう遠くない。私はそれでも構わない。カネのベクトルとは違うほうを向いた知識をたくさん持って、楽しく生きて行くだけだ。

knowledge3.indd 256 2017/04/07 21:10:01

知識と道徳

学業によって得られる知識を優先するあまり、大事なことが欠落している人がいる。私たちとは言えず、私がとしか言えない人。他人の話を聞けず、自分のことばかり話している人。そんな人が勉強しても、自分のためだけの勉強になる。そんな人が知識を得ても、人のためにならない。

道徳について、北野武がとてもいいことを書いている。

- 道徳がどうのこうのという人間は、信用しちゃいけない。
- 道徳なんてものは、権力者の都合でいくらでも変わる。
- いつの時代も、どんな人間にとっても通用する、絶対的な道徳はないっていうことは間違いない。
- 道徳を云々するなら、まずは自分が守ること。それができないなら、道徳を語ってはいけない。
- 昔ながらの日本的な道徳観を支えているのは、単なる郷愁くらいのものなのだ。
- 時代を作る人は、いつだって古い道徳を打ち壊してきた。自分なりの道徳で生きるのは格好いい。
- 誰かに押しつけられた道徳に唯々諾々と従うとバカを見る。それは昔の人が経験済みのことだ。
- 学習指導要領には、「児童の道徳性の育成に、大きな影響を与えている社会的風潮」のひとつとして、「物や金銭等の物質的な価値や快楽が優先される」とある。それはあんたたちのことだろう！　と、とりあえずツッコんでおく。

こういう感覚を持つ北野という人が出来上がる社会、そして来たのを好ましく思う人がたくさんいる社会が、悪い社会であるわけがない。

knowledge3.indd　257　2017/04/07　21:10:01

5・2　知識と文化・言語

知識は文化によって大きく異なる。言語が違えば、知識は違う。文化の枠組みが知識を規定してしまったり、言語の特性が知識に大きな影響を与えたりという例は、世界中に溢れている。

それでも、文化の枠を超え、言語の違いを乗り越えて、普遍的とも言うべき知識がある。

アフリカに、「もし木が『斧が木になにをするのか』を知っていたら、木は斧に柄を提供したりしなかっただろう」という格言がある。この知ってさえいればという感じ、知識があればという感じは、アフリカでないところの人にも、よくわかる。

文化の枠のなかの知識、文化の枠を超える知識。言語特有の知識、言語を超えて存在する知識。そんな知識のいろいろについて書いてみたい。

知識と文化

村上春樹が『やがて哀しき外国語』のなかで、アメリカから見た日本のことを、「情報が咀嚼に先行し、感覚が認識に先行し、批評が想像に先行している」と言っている。

情報が咀嚼に先行し、感覚が認識に先行し、批評が想像に先行している。それが悪いとは言わないけ

knowledge3.indd　258　2017/04/07　21:10:01

れど、正直言って疲れる。僕はそういう先端的波乗り競争にはもともと関わってこなかった人間だけれど、でもそういう風に神経症的に生きている人々の姿を遠くから見ているだけでもけっこう疲れる。これはまったくのところ文化的焼き畑農業である。みんなで寄ってたかってひとつの畑を焼き尽くすと次の畑に行く。あとにはしばらく草も生えない。本来なら豊かで自然な創造的才能を持っている創作者が、時間をかけてゆっくりと自分の創作システムを掘り下げていかなくてはならないはずの人間が、焼かれずに生き残るということだけを念頭に置いて、あるいはただ単に傍目によく映るということだけを考えて活動し生きていかなくてはならない。これを文化的消耗と言わずしていったい何と言えばいいのか。

引用が長くなってしまったが、流行についての日本の特殊性は、外国にいるとよく見えてくる。クリエーターと呼ばれる人たちが先端的波乗り競争のなかで焼かれずに生き残ろうとし、若い女の子たちがルイヴィトンやシャネルのバックを持とうとする社会。そこには、「他人からどう見えるか」がとても大事で、「みんなと同じか」に敏感な人たちがいる。その人たちの知識はどんなものか。そしてそこで生まれる文化はどんなものなのか。

笹口健は『文化とは何か』のなかで、文化を「人間の知的な思考・行動様式」と定義し、その上で文化を「生活の文化」、「感性の文化」、「知性の文化」の3つに明確に分けている。衣・食・住の「生活文化」のことを話しているときに、美術・音楽のような「感性の文化」のことや科学・哲学のような「知性の文化」のことを持ち出すと、焦点が定まらなくなってしまうからだ。

そして日本の文化は「生活の文化」に尽きる。日本国憲法の「健康で文化的な最低限度の生活」の「文化

knowledge3.indd 259 2017/04/07 21:10:01

的」という言葉が意味するのは「生活の文化」だし、ツイッター（Twitter）上でつぶやく人が多いのも「生活の文化」のあらわれだ。

山角俊介は、なぜツイッターは日本で人気なのかを掘り下げて、説明している。理由の1つとして「影響されやすく、集団行動を好む我々日本人の特性」があるという。マスコミは揃ってツイッターを紹介。また、芸能人や知識人もこぞって愛用し、世間では、「ツイッターってすごい！」感が溢れ、最早、「え、ツイッターやってないの？　流行に鈍感だね。」なんて言われてもおかしくないのが現状だ。日本では多くの企業アカウントが存在し、企業はツイッターを情報発信の道具として利用している。ツイッターを始めた理由が「周りがやっているから何となく」というのもだとしても、わけもなく真面目に取り組んでいる。

三上功は、そんな日本の流行と文化のことを、フランスと比較することで浮き彫りにしている。なぜフランス人は流行を追わずにそれぞれが違う服装をするのか。

三上は、日本人の「人間みな平等」という意識と、フランス人の「人間は平等ではなくそれぞれ違うものだ」という意識の違いが、「流行に乗ったファッション」と「個性に合ったファッション」になってあらわれているという。他人と同じ意見を持つことが大事だとされる日本では、その場の雰囲気が読めなかったり、流行に遅れたりすることは、社会に属していないも同じ。それに対し、自分の意見を持つことがもっとも大事だとされるフランスでは、その場の雰囲気に合わせたり、流行に流されたりすることは、生きていないのと同じ。日本人は他人と同じことで安心を得、フランス人は他人と違って初めて自分の存在を確認する。我を通さない、通す。他人に干渉する、干渉しない。違う生き方を否定する、肯定する。

いろいろな違いを強調したところで、違いがあるというだけだ。でもそんな違いの数々は文化の違いを生み、結果として持っている知識の違いを生む。日本人の頭のなかにある流行や流行語の知識は、フランス人

knowledge3.indd 260 2017/04/07 21:10:01

の頭のなかにはない。その代わりに、村上春樹の文章に出てくる「時間をかけてゆっくりと自分の創作システムを掘り下げていく」というのが得意なフランス人が持つ知識は、日本人には持つことができない。

これは、違いがあるというだけのことで、どちらがいいというものではない。変化のスピードが速いなかでは日本人の持つ動的な知識が意外と役に立つのかも知れないし、どんな社会になったとしてもフランス人の持つ変わらない知識のほうが役に立つのかもしれない。

文化とか知識とかは、優劣を競うものではないし、ましてや順番をつけるものでもない。

日本文化

デービッド・アトキンソン（David Atkinson）が、日本文化の特徴を、イギリス人の視点から書いている。日本文化の特徴は「海外の文化を取り入れて、改良し、伝えていくこと」と言われているが、そんなことは、どこの国でもしているという。アトキンソンが考える日本文化の特徴は、古いものを残しつつ、そこに新しいものを加えていく「足し算」だ。ヨーロッパの多くの国の場合、新しい文化を取り入れると古い文化と入れ替えることが多いが、日本はほとんど入れ替えることなく、古い文化を守ったまま新しい文化を足してきている。それによって日本は、多様性に富んだ文化を育んできたというのだ。

このような独自の文化ができた最大の背景には、「人」があると思っています。「古い文化」を後世に伝えるのは「人」だからです。それが近代になって家庭における「文化」が大きく変わってきたことで、これまでのように文化がつながらなくなっています。ということは、これまでのような「足し算」が機能せず、さまざまなものが消え去ってしまうということなのです。

knowledge3.indd 261 2017/04/07 21:10:01

アトキンソンはこれを、危機と呼ぶ。大家族がなくなり、髪型、着物、言葉遣い、気配り、礼儀作法などが、親から子供、孫へと伝承されなくなったことにも、その一因だという。

私はそれが危機だとは思わない。アトキンソンはイギリス人らしく、気持ちだけでは文化の承継ができないという。作法を生み出してきた畳や障子などからも縁遠くなってしまうと危機感を募らせるが、「着物で暮らす」、「襖の開け閉めをする」といったことに大きな価値を置かない私たちには、文化の継承など、どうでもいいことなのだ。

京都の町屋よりもタワーマンションを選ぶ今の日本人に、足利義政の頃に生み出されたものを守れといっても、所詮それは無理なことだ。

東洋と西洋

リチャード・ニスベット（Richard Nisbett）が「東洋人と西洋人の違い」について書いている。世界観というような根本的なところが、大きく違っているというのだ。どういうことに注意を向けるかが違う。複雑な環境のなかで関係を見抜いたり物事を見分けたりするためのスキルが違う。ある結果の原因を何に求めるかが違う。物事を考えるための道具、知覚する道具、記憶する道具、推論する道具が違う。論理的に正しいということが違う。同じ絵を見ても、脳裏に映る画像が違う。ニスベットはこの違いがなぜ生まれるのかを解明した。

心理学者特有の言葉遣いがニスベットの文章を難しいものにしているが、書いてあることはとてもわかりやすい。東洋人と西洋人の違いは、ものの見方、気づき方だけでなく、法律家をどう思うか、科学者をどう

knowledge3.indd 262 2017/04/07 21:10:01

思うか、討論をするか、しないか、人権をどう思うかということにまで及ぶ。読んでいて、あまりに違うことに驚く。

この違いは、問題だろうか。グローバリゼーションのなかでも、この違いはずっとあり続けるのか。違いは違いであって、そこに優劣はない。違いが対立になることなく、補完の関係になるか。和解に繋がるか。

東洋人と西洋人の違いは、男と女の違いより、ずっと大きい。違いを知り、違いを認めることから始めなければならない。

知識と言語

山下洋子が２０１２年に『放送用語委員会報告』のなかに書いた「vodka」のカタカナ表記の話が面白い。NHK および新聞協会では「ウオツカ」という表記を採用してきたのだが、日本語としては「ウオッカ」「ウォッカ」の形で定着していて、「ウオツカ」では違和感があるという。この問題について、NHK の「放送用語委員会」の委員の意見が紹介されている。

荻野綱男委員：　誤読からのスタートであることは確かだが，すでに［ウオッカ］または［ウォッカ］の発音が普通になってしまった。ことばの問題は多勢に無勢である。「ウオッカ」が多数であるならば「ッ」でいいのではないかと思う。

清水義範委員：　「ウオツカ」のほうが原音に近いということをここで初めて知った。「vodka」はこれだけみんなが「ウオッカ」と言っているものを「ウオツカ」にこだわるのも無

knowledge3.indd　263　2017/04/07　21:10:01

理だろう。そろそろ「ウオッカ」でいいのではないか。こういう問題にそろそろというのも変だが，みんなが言ってしまっていると，そろそろという気になってくる。崩さざるをえないということだろうか。

井上史雄委員：結論に賛成である。誤読であることは確かである。戦前に「ッ」「ャ」「ュ」「ョ」を小さく書かなかったために出てきた誤読である。１９７３年の調査でこれだけの使用率であり，現代では「ウオッカ」で問題ないと思う。

野村雅昭委員：この問題については「ウオッカ」とせざるをえないということで賛成する。

天野祐吉委員：「ウオツカ」というとキザな感じがする。通ぶっている感じ。今はみんな[ウオッカ]と言っているし，「ウオッカ」でいいと思う。しかし，「ウオツカ」も間違いではない。「ウオツカ」の表記も入れておいてはどうだろうか。「ウオツカ」が間違いというのも変な話だ。

井上由美子委員：「ウォッカ」の表記も気になるが，一気に「オ」と「ツ」を小さくするわけにはいかないだろう。現状を考えると「ウオッカ」とせざるをえないと思う。

じつはこの話は、そう簡単な話ではない。サントリーが「ウオツカ」を使っているのだ。サントリーにはサントリーなりの言い分があるはずで、「ウオツカ」が「ウオッカ」に変わるなど到底承服できないだろう。これに対し、「ウオッカ」を使っているアサヒは嬉しいはずだ。

そして「ウォッカ」を使っているその他の会社は、この委員会の委員たちの意見についてどう思うのだろう。「一気に『オ』と『ツ』を小さくするわけにはいかないだろう」という意見で「ウォッカ」が退けられてしまっ

knowledge3.indd 264 2017/04/07 21:10:01

たら、サッポロもキリンも宝酒造も浮かばれない。

たとえばウィキペディアは「ウォッカ」という表記がなされている。漫画『名探偵コナン』に出てくる人物も「ウォッカ」、漫画『王ドロボウＪＩＮＧ』に出てくる人物も「ウォッカ」。「ウオッカ」という表記がなされているのは競走馬くらい。牝馬ながら２００７年の東京優駿を制し、２００８年の秋の天皇賞を制した「ウオッカ」だ。

そもそも「ウオツカ」が原音に近いというのからして怪しい。ロシア人の友達何人かに「ｖｏдｋａ」と言ってもらったが、そのなかに「ウオツカ」に近い発音をした人などひとりもいなかった。しいて日本語にすれば「ヴォトゥカ」だ。「ヴォ」を強く発音し「トゥカ」はそれにくっついた感じ。もっとも原音がロシア語とは限らないから、そんな議論は意味がない。

時計は「ウォッチ」であって、「ウオッチ」や「ウオツチ」のほうがいいなどと言う人はいない。野球の「キャッチボール」を「キヤッチボール」とか「キヤツチボール」と表記しようという人も出てこない。「ｖｏｄｋａ」も「ｖｏдｋａ」も、「ウォッカ」でいいのだ。

とはいえ、８０年以上続く「放送用語委員会」の委員になって意見を述べなければならない「学識経験者」たちの苦労を考えると軽々しいことは言えない。そこで決められたことは尊重してもいい。

でも、本心を言ってしまえば、若い人を何人か連れてきて、「もう全然大丈夫」とかについて意見を聞いたほうがいいような気がする。少なくとも、老人たちの意見を尊重するよりも、いいんじゃね？

日本のことばかり書いてきたが、フランスはフランスで、ロシアはロシアで、言葉のうつろいにはとても苦労している。日本だけが特別なわけではない。テクノロジーの発達に伴い、今まで存在しなかった概念が英語の用語と共に大量に流れ込んできたのは、フランスもロシアも、そして日本も同じだ。フランスやロシ

knowledge3.indd 265 2017/04/07 21:10:01

アで遅ればせながら定められた造語は誰にも使われず、英語をフランス語風・ロシア語風に発音した「変な言葉」がまかり通っている。その辺の事情は日本の「カタカナ英語」と、まったくといっていいほど変わらない。

日本に新しい概念と用語が大量に流れ込んでくるのは、今回がはじめてではない。私たちの知る限り、千年も二千年もの昔から、中国や朝鮮からありとあらゆるものが伝来してきた。仏教が伝来すれば、新しい概念と用語が流れ込む。豆腐が伝来すれば、やはり新しい概念と用語が流れ込む。なかにはすっかり日本化し、それが大陸から来たものだということが忘れ去られ、日本独自のものだと思われているものも多い。

流れ込んできた当初は、馴染みがなく変だと思われた言葉も、長い年月のあとには日本独自のものだと信じられるほどに定着する。最近に日本に流れ込んできた言葉も、大半はすぐに消えてゆくにせよ、残ったものはやがてみんなの知識になってゆく。言語の知識も他の知識同様、変化し続ける。そう思って間違いない。

日本の犬とアメリカの犬は、互いに話すことができるか？

『宝島社』の広告に、大きなラブラドール・レトリバーっぽい犬と、小さな柴犬っぽい犬が並んでいる白黒の写真がある。その写真の上には、「Can a Japanese dog and and American dog talk to each other?（日本の犬とアメリカの犬は、互いに話すことができるか？）」と英語で書いてある。隅にある『宝島社』という文字が、その紙面が広告であることを思い出させる。

大きなラブラドール・レトリバーっぽい犬がアメリカの犬で、小さな柴犬っぽい犬が日本の犬ということなのだろうか。その写真を見て、「2匹とも、すごくかわいいと思わない？」、「アメリカ人と日本人はコミュ

knowledge3.indd 266 2017/04/07 21:10:01

ニケートできないけど、犬ならできるんじゃない？」、「なんで、同じ大きさの犬を並べなかったの？」などなど、いろいろな意見や感想が出てくる。

意見や感想が多ければ多いほど広告は成功したと言えるのだろうが、どうも釈然としない。これは日本のメディアに載った広告なのだ。そしてメッセージは英語で書いてある。もしアメリカのメディアに日本語で「日本の犬とアメリカの犬は、互いに話すことができるか？」と書いた広告が載ったら、ほとんどのアメリカ人は何のことかわからず、広告は意味を持たないだろう。

この広告の意味は、「英語を勉強しなければアメリカ人と話すことができませんよ」なのだろうか。だとしたらこの広告はあまりにも偏ってはいないか。アメリカ人が日本語を勉強すれば日本人と話すことができる。でもそんなアメリカ人はあまりいない。これは不公平ではないか。なぜ日本人は日本語と英語を話さなければならず、アメリカ人は英語だけ話せばいいのか。そんなことを言う人が出てきても不思議はない。

でも知識という観点から見れば、アメリカ人より日本人のほうが、運がいい。一つの言葉しか知らない人よりも、二つの言葉を知る人のほうが、知識は豊かで、視野は広い。しかも、考えに偏りが少ない。

いくつもの言葉を話す人の多いヨーロッパ大陸で近代哲学が発達してきたのも、寛容な考え方が根付いたのも、死刑という制度がないのも、決して偶然ではない。

宝島社の広告は確かに変だが、変なのは宝島社ではなく、日本の社会なのだ。でも日本の社会が変なのは決して悪いことではなく、そこに住む日本人にとってむしろ幸いなことなのだ。二つ以上の言葉を話し、広い視野を持ち、豊かな知識を持つことは、いいことなのだ。

knowledge3.indd　267　2017/04/07　21:10:01

随筆、エッセイ

読む人はそうは思わないだろうが、私は随筆を書いている。少なくとも、そのつもりでいる。随筆というと、江戸時代末期の「日記的随筆」や現代の「日記的ブログ」のような気楽なものを思い浮かべる人が多いが、10世紀末の清少納言の『枕草子』に始まり、鴨長明の『方丈記』、吉田兼好の『徒然草』、一条兼良の『東斎随筆』、松平定信の『花月双紙』、新井白石の『折たく柴の記』などなど、心の赴くままとは言いながら格調高いものも多い。

吉田兼好が「露霜にしほたれて、所定めずまどひ歩き、親の諫め、世の謗りをつゝむに心の暇なく、あふさきるさに思ひ乱れ、さるは、独り寝がちに、まどろむ夜なきこそをかしけれ。さりとて、ひたすらたはれたる方にはあらで、女にたやすからず思はれんこそ、あらまほしかるべきわざなれ」と筆を運ぶ。７００年近く経ってから私がそれを読み、なにかを感じる。随筆は時に、不思議な力を持つ。

私が書いているのは日記的ではない。かといって格調の高いものでもない。アカデミックなものと勘違いした人から参考文献の書き方などについて苦情が寄せられても、返す言葉がない。随筆だといっても、わかってもらえない。かといって私の文章が随筆なのかどうかが定かなわけではない。「私はエッセイを書いている」と言ってみても、果たしてそうなのかどうか。ただただ気恥ずかしくなるばかりだ。

16世紀末のミシェル・ド・モンテーニュ（Michel de Montaigne）の『エセー』に始まり、現在世界中の採用試験で取り入れられている「エッセイ」に至るまで、エッセイと呼ばれるものはすべて綿密な思索を基にした論文的なスタイルの文章ばかり。私の文章は「自由に自分の考えを書いたもの」ではあっても、エッセイではない。

ウィキペディアには「随筆とは、文学における一形式で、筆者の体験や読書などから得た知識をもとに、

knowledge3.indd 268 2017/04/07 21:10:02

それに対する感想・思索・思想をまとめた散文である。随想、エッセイ、エッセーなどともいう」と書いてある。英語版のウィキペディアには「エッセイは著者の独自の議論を表現する学術的な作品だ」と、またフランス語のウィキペディアには「エッセイは広い範囲の様々な話題について個人的な観点から書いた作品だ」と書いてある。

やはり私が書いているのは、随筆でもエッセイでもない。ではなんなのかと問われても、答えようがない。

知識の伝播

夕方、イラン人とイスラエル人と一緒にビールを飲んでいて、「こころ」の話になった。私は「日本語には、英語のハート（心臓）とマインド（心）の両方を意味する『心』という字がある」などと「ない知識」を総動員して、二人を煙に巻こうとした。ところが二人は、ペルシャ語やヘブライ語にも、似たような単語があると言う。ペルシャ語の「デル」や、ヘブライ語の「レブ」も、日本語の「心」のようなものだと言うのだ。

二人は私よりもはるかに物知りで、ラテン語の「コル」やギリシャ語の「カルディア」といった言葉も、同じだと言った。「デル」、「レブ」、「コル」、「カルディア」といった言葉が「心」のような言葉かどうかは、その場では確かめようがなかったが、話は言葉の伝播のこと、そしてシルクロードのことにまで及んだ。

イスラエル人は、英語の「ハート」も似たようなものだと言った。私は、英語では「ハート」と「マインド」をきっちり分けているじゃないかと言った。そして二人のあいだに座っていたイラン人は「英語のことなんてどうでもいい」と言い、「これが偶然なわけはない」と続けた。「デル」の概念がシルクロードを通って日本に行ったとしても、何の不思議もないと言う。

knowledge3.indd 269 2017/04/07 21:10:02

私は「心」は痛くなるが、「デル」も痛くなるか、「レブ」も痛くなるかなどと言ってからみ続けたが、話題は他のことに移り、言葉の話に戻ることはなかった。

どうにもすっきりしなかったので、アパートに戻ってからインターネットでいろいろと見てみた。そうしたら、ハンス・ウォルター・ウォルフ（Hans Walter Wolff）の「体のパーツがメタファーとして使われている言葉」というリストが見つかった。それを見た私は、知識の伝播を確信した。ヘブライ語と中国語の言葉が、とてもよく似ていたのだ。

ついでに言えば、中国の「心」が日本に伝わり「こころ」になったのであって、「こころ」という概念がもとから日本にあったわけではない。「デル」、「レブ」、「コル」、「カルディア」といった概念も、もとからあったわけではないだろう。すべて、知識の伝播のおかげなのだ。

知識の伝承

エリック・ホブズボーム（Eric Hobsbawm）が「伝統」について書いている。伝統というと古くからあるものと思いがちだが、意外と最近に生まれたものが多く、しかもその多くが作り出されたもの。伝統と呼ばれるもののほとんどは、伝統でもなんでもないという。

古くからのやり方が今でも生きているのなら、伝統をよみがえらせたり、作り出したりする必要はない。伝統は、過去を振り返り、なくなったものに郷愁を覚えた人たちが、形式化と儀式化を繰り返したあげくに作り出したものだという。

なくなってしまったものは、たとえそれが酷かったものでも、美化される。なくなってしまったもの、例

knowledge3.indd 270 2017/04/07 21:10:02

えば戦前の日本の「教育」や、ロシアがソ連のなかにあった頃の「文化」などは、時代が下れば下るほど美しくなって行く。故郷のなくなってしまった風景は、想像のなかで浄化され、朽ちたものや錆びたものまでもが美しさになる。会えなくなってしまった初恋の相手は、ほろ苦さを伴いながらも、いつまでも美しい。

伝統は、なくしてしまったものへの想いから生まれる。そしてその想いが伝統を続けさせる。

みんなのなかから、なくなったものへの想いが消えたとき、伝統も消える。そして新しい伝統が再び作り出される。

イギリスの伝統にしても、日本の伝統にしても、現代になって作られたものばかり。そしてなぜか、アメリカやオーストラリアのような歴史の浅い国に限って伝統が多い。でもそれは、不思議なことではない。なくしてしまったものへの想いが伝統の「もと」だとすれば、伝統が古いもののわけはない。想いがせいぜい100年ほど前までしかさかのぼれないのに、伝統だけが何百年、何千年も続くわけがないのだ。伝統を表面的に続けていくことはできても、伝統を心の部分まで含めて守り続けることは不可能に近い。

実際、伝統というものを背負うことになってしまった人たちの多くが、「新しいものを取り入れることでしか、伝統は継承できない」と考えている。例えば『福寿園』という二百数十年の伝統を受け継いだ福井正憲は、サントリーとのコラボレーションブランド『伊右衛門』を世に出した時に、「業を継いできた先人は茶づくりの伝統の術を活かしながら、つねに新たな時代の技術やビジネスを取り入れて家業を発展させ」と言っている。陶芸も歌舞伎も同じ。伝統は変えなければ、つまり作り直さなければ、伝えてはゆけない。

伝えることが出来るのは、今意味を持つ知識であり、技である。同じ知識や同じ技が、明日通用するとは限らない。知識も技も、伝承しようと思ったら、変わり続ける環境に適応していかなければならない。そうしなければ、せっかくの知識も技も、なくなってしまう。

knowledge3.indd 271 2017/04/07 21:10:02

伝えるのは、本当に難しい。

言わないほうがいいこと

エッガー出版社（Egger Publishing, Inc.）の『レベッカ・シットンの綴り方資料集（Rebecca Sitton's Spelling Sourcebook）』のなかに「よく使われる単語」のリストがあり、「the」「of」「and」「a」「to」「in」「is」「you」「that」「it」というように、単語が使用頻度順に並んでいる。確かに「the」とか「of」とかはよく使われる。驚くようなことは何もない。

驚いたのは表の解説だ。みんなが書く文章に使われている単語の33％が、リストの上位の25の単語だというのだ。そして89％が千の単語だという。文章の90％近くが千の単語で出来ているということは、言い換えれば、難しい単語を知らなくても文章を書いたり読んだりできるということだ。

そういうことは、昔から言われてきた。シットンのリストを曲解して「１００の単語を知っていれば会話の半分はわかる」と言う人がいる。でも本当にそうだろうか。「1万5千の単語を知らなければ本は読めない」と言う人がいるかと思えば、「この2千の単語を知っていればどんな本でも読める」と言う人もいる。たぶんどちらも正しく、どちらも正しくないのだろう。

私たちの「もっと知りたい」という気持ちが、そして好奇心が、言葉を豊かにする。「やばい」「まじ」「なるほど」といった言葉だけで会話が成り立ってしまう今の若者や、「めし」「風呂」「寝る」しか話さない昔の男たちはともかく、普通に興味を持って普通に暮らしていれば、使う単語の数は自然と増えていく。

問題は知っている単語の数を増やすことでも、うまく書いたり、うまく話したりすることでもない。私た

knowledge3.indd 272 2017/04/07 21:10:02

ちは思っていることを書きたいし、話したいのだ。放っておけば書きもするし、話しもする。そして「書きすぎて、話しすぎて」失敗する。

ピコ・アイヤー（Pico Iyer）は、「幸せの秘密は、どんな関係においても、なにを言わないかを知ることだ」と言った。小さい頃から「なにを言ったらいいか」は教えられてきた。でも「なには言わないほうがいいのか」は誰も教えてくれなかった。実際の社会では、なには書かない方がいいのか、なには話さないほうがいいのかということが、とても大事だ。

辞書のなかの言葉

シェル・ド・モンテーニュ（J. A. H. Murray）は19世紀から20世紀にかけて英語辞書の編纂をした人で、今の英語辞書の礎を築いたことで知られている。そのモンテーニュが、編纂した辞書の「前書き」に、辞書を作るにあたっての考えを書き連ねている。そこには基本的なことばかりが並び、あまりの純粋さに驚かされる。

英語にはどれだけの数の単語があるのかという疑問に、明確な答えはないという。なにが単語なのか。なにを単語とするか。そんな疑問に答えられる人は、どこにもいない。辞書を編纂する人たちはみんな「なにを辞書に入れ、なにを入れないか」ということばかり考えている。だから「なにが単語なのか」という疑問は自然なものなのだろう。

言葉は生きている。だから生まれる単語があることも、使われなくなって消えていく単語があることも、なんの不思議でもない。「標準的な単語」と言うけれど、標準とはなにか、なにをもって標準とするのかと

knowledge3.indd 273 2017/04/07 21:10:02

考えると、なにもわからなくなる。文学で標準的な単語は、会話では標準的ではない。

ある専門分野で標準的な単語も、大方の人にとっては標準的でもなんでもない。ある地方で標準的な単語も、他の地方では誰も知らない。ところがどんな専門的な単語も、どんな方言も、みんなが使うようになれば「標準的な単語」ということになる。スラングやジャルゴンさえも、みんなのあいだに広まれば「標準的な単語」になる。辞書の世界は、変わり続けているのだ。

考えてみれば、ひとりひとりの語彙は大きく違う。ひとつひとつの単語の意味も人によって大きく違う。だから、ほとんどの人が満足する辞書を作るなんていうことは、不可能なのだ。その不可能なことを仕事にしてしまった人たちの苦悩とか、覚悟とかが、モンテーニュの「前書き」から伝わってくる。

辞書の編纂を仕事にした人の言葉についての知識は、とても豊かだ。人工知能（ＡＩ）が現実を俯瞰しビッグデータを利用してあっという間に作る「統計的に正しい」辞書よりも、人が年月をかけて作る「完璧からはほど遠い」辞書を選びたいと思う。

ちょっと余計なことを付け加えると、紙の辞書が電子辞書に置き換わっても、電子辞書がワープロに組み込まれ「間違い」が自動的に直されるようになっても、間違いだらけの文章を、そして字句が統一されていない文章を書き続けていきたい。これは私の自分への願いだ。

知識がないと味わえないこと

和歌を味わうとき、ちょっとした知識の「ある・なし」が、「わかる・わからない」や「楽しい・楽しくない」を分けてしまう。

knowledge3.indd 274 2017/04/07 21:10:02

例えば次の3つの歌はどうだろう。

山里は冬ぞさびしさまさりける 人めも草もかれぬと思へば　（源宗于）
わがまたぬ年はきぬれど 冬草のかれにし人はおとづれもせず　（凡河内躬恒）
ことの葉も霜にはあへずかれにけり こや秋はつるしるしなるらむ　（大中臣能宣）

ここに出てくる「かる」を、単に「枯る」と考えるか、「枯る」と「離る」との掛詞と考えるかで、歌の味わいは変わってしまう。「離る」は遠くなり会えなくなることだが、心が「離る」と考えると、歌のなかの情景はより一層さみしいものになる。

言葉だけでなく、時代背景も知らなければならない。例えば次の歌がある。

〈詞書〉かれがれなるおとこの おぼつかなくなどいひたりけるによめる
有馬山ゐなの笹原かぜ吹けば いでそよ人を忘れやはする　（五十八 大弐三位）

この時代に「男が女のところに来なくなる」といったとき、それがとういう意味を持つのか。それを知れば、切実さと深刻さがわかり、歌はより一層心に響く。

また年を取らなければ、わからないこともある。

ひと夜とて夜がれし床のさむしろに やがても塵のつもりぬるかな　（二条院讃岐）

knowledge3.indd 275 2017/04/07 21:10:02

この歌のせつなさは、大人でなければわかるまい。

掛詞にはこの他にも、「敢へず」と「会へず」の「あへず」や、「秋果つる」と「飽き果つる」の「あきはつる」などがあり、使いようによっては歌に深い味わいが出たりもする。和歌には、「知識がなければ楽しめない」ということは意外に多い。

次の3つの歌はどうだろう。

さびしさはその色としもなかりけりまき立つ山の秋の夕ぐれ　（西行）
見渡せば花ももみぢもなかりけり浦のとまやの秋の夕ぐれ　（定家）
心なき身にもあはれは知られけりしぎたつ澤の秋の夕ぐれ　（寂蓮）

これらの歌を味わうには、それなりの知識がいるという。私のように知識なしで楽しむのと違い、知識があってこれらの歌を味わうと、また格別だという。

私はただただ「そうなんだろうなあ」とつぶやく。

お！てめえ、さしずめインテリだな

山田洋次は『男はつらいよ』のことをたくさん話した。自分が作った映画のことを自分で話すのだから、なんだかおかしい。でも、とても面白い。そんななかに、寅さんのインテリ嫌いについて話している記録が

knowledge3.indd 276 2017/04/07 21:10:02

ある。

山崎努が演じる若い医者と寅さんが言い争いをしている。医者が「その点については僕が謝る」という言ったのを受けて、寅さんが「お！てめえ、さしずめインテリだな」と言う。

その場面で観客が大爆笑したのを見て、山田はびっくりしたのだという。「てめえ、インテリだな」というのは山田が書いたセリフ。だけど、そこに「さしずめ」をくっつけたのは渥美清。優れた俳優というのは、とっても素晴らしい言葉を、時々無意識に出してくるのだという。

それだけの話なのだが、それをわかるには、人のこと、映画のこと、言葉のことなどなど、たくさんの知識が要る。知識があって映画を味わうと、映画はとても面白い。

知識と芸術

イマーン・マレキ（Īmān Maleki）はイランの画家。ホキ美術館に並んでいるような写実絵画を多く描く。絵から伝わってくるのは、人。そして生活。政治ではなく、宗教ではなく、戦争でもない。普通の人。超写実と言ってもいい。

芸術が人によるものだと思ったとき、そして人が創り出したものだと考えたとき、ぽっと浮かんでくる顔がある。ジュネーブの古い石造りの家の長い時間のなかで創作を続けるシャフィック・アルナワブ（Shafik Alnawab）。マンハッタンのアパートで喧騒に囲まれて創作を続けるフレデリック・ルレ（Frédéric Lère）。比企郡のアトリエで自然に囲まれて創作を続ける久保孝久。そしてなにもかもがあっという間に変わってしまう東京で創作を続ける立花ハジメ。

knowledge3.indd 277 2017/04/07 21:10:02

芸術はいつも、ひとり。シャフィックの妻が芸術家だからといって、二人で芸術制作を行うわけではない。フレデリックが他の人と一緒にアバクロンビー&フィッチ（Abercrombie & Fitch）の吹き抜けを利用した巨大な壁画を描いたときも、フレデリックはいつものようにひとりだった。久保孝久が自然と一緒になって鴨川の海や浅間山を描くときも、久保はひとり。立花ハジメが、横尾忠則との共同作品を発表しても、ひとり。

芸術には知識が必要だが、知識がすべてではない。デザインが頭で考えて計算して作り出すものなのに対し、芸術は体で感じたことが湧き出てくるもの。そう考えると、「芸術家がいつもひとり」なのがよくわかる。

芸術家が知識をあえて捨てているように見えるのは、なぜだろう。私は芸術家でないから、その辺のことは、わからない。

knowledge3.indd 278 2017/04/07 21:10:02

5・3　知識と国家・社会

一つの国のなかでみんなが同じ知識を持っていて、その知識が他の国に行ったら通用しないということがある。その国にはその国で、共通の知識がある。普段は意識しなくても、その国のなかだけで通用する知識と、世界中で通用する普遍的な知識とがある。

国家のなかで、人々は知らず知らずのうちに、それぞれ別々の社会を構成する。田舎で自然の環境のなかで暮らす人の知識と、都会で人工の環境のなかで暮らす人の知識が、同じわけはない。それぞれの知識に共通点はない。

知識と国家、そして知識と社会を考えることで、私たちの知識のうち、なにが普遍的で、なにが普遍的でないかを、見つけ出してみよう。

知識と国家

マット・ローゼンバーグ(Matt Rosenberg)は、カントリー(country)、ステート(state)、ネーション(nation)を明確に分けて考えようと繰り返し言い続ける。3つの単語は必ずしも同じではない。どれも国という意味だが、カントリーは地理的な、ステートは政治的な、そしてネーションは文化的・人種的なニュアンスを持つという。

knowledge3.indd 279 2017/04/07 21:10:02

ただそんなことは、一概には言えない。イギリスは4つのネーションで出来ているし、アメリカは50のステートで出来ている。カントリー、ステート、ネーションという単語は、時にきっちりと、ときにルーズに使われてきた。カントリーをステートと言い換えても意味が変わらないという場合は多いが、言い換えてはいけないこともある。

ではこの3つの単語の使い分けは難しいのだろうか。ユナイテッド・ネーションズ（国連、United Nations (UN)）やユナイテッド・ステーツ（アメリカ合衆国、United States (US)）が何を意味するかは誰にも明らかだし、ネーション・ステート（Nation-state）の意味もはっきりしている。

そういうことに比べれば、日本語での「国」と「国家」の違いはずっとシンプルなのかもしれない。少なくとも「知識と国家」がなにを意味するのかは、はっきりとわかるのではないか。

ところで私は、「知識と国家」について書く際に、日本という国家のことを書くことは必要ないと思っていた。日本のことを書かなくても、一般的なことや、どんな国家にもあてはまることを書けば、それでいいと思っていたのだ。

でも、姜信子の本を何冊か読んで、気が変わった。姜は「一つの名前、一つの言語、一つの文化、一つの国家」という枠組みのことを書いているが、そんな枠組みがあたりまえになっている日本のことは、そしていまだに国家主義の虜になっている日本人のことは、書かずにいられなくなった。

私は何年か、スイスに住んだ。スーパーでミルクを買っても、ジュースを買っても、紙パックには、ミルクとかジュースという単語が4か国語で書いてある。スイスにはスイス語はなく、地方によってドイツ語、フランス語、イタリア語、ロマンシュ語が使われている。話す言葉によって、文化も違う。「一つの言語、一つの文化」ではないのだ。

knowledge3.indd 280 2017/04/07 21:10:02

フランスにも住んだ。イヴ・モンタン（Yves Montand）はイタリア系、ジネディン・ジダン（Zinedine Zidane）はアルジェリア系、ニコラ・サルコジ（Nicolas Sarközy）はハンガリー系という国で、誰も私のことを日本人として扱ってはくれない。フランス語の発音のせいで私は「シンイチ」ではなく、「シニシ」だった。私の身分証明書はフランスの自動車免許だったし、グラウンドではフランスの町のチームのメンバーとしてボールを追い、プールではフランスの水泳連盟の審判員としてストップウォッチを握った。私のパスポートなど誰も気にしてくれなかった。

アメリカにも住んだ。アメリカというのは複雑な国で、があるようでもあり、またそんな枠組みなどまったくないようにも見えた。ただ言えるのは、アメリカは一つではないということ。そしてそこで、私はいつも外国人、それも日本人だった。

今はもう、「一つの名前、一つの言語、一つの文化、一つの国家」という枠組みは、あまり意味を持たない。グローバルな世界で、そしてその一部としての日本で、その枠組みが静かに崩れている。街はいつの間にか聞き覚えのない言葉で溢れ、免税を謳った店は外国からの旅行者でいっぱいだ。混血が進み、二つ以上の言語を話すことや二つ以上の文化を持つことがあたりまえになってくると、一つのアイデンティティを持つことが難しくなり、個人に一つの国家を押しつけることが不可能になる。

日本の国家は国民に二つ以上の国籍を持つことを禁じ、日本国籍を選びたかったら他国の国籍を放棄しろという。ギリシャの国家は国民の国籍離脱を条件が整うまで認めず、兵役が終わるまではギリシャの国籍は放棄できないという。それぞれの国家がばらばらに勝手なことを決めるから、両親のせいで二つ以上の国籍を持つことになった人たちはみんな、国家のあいだを右往左往する。

国家には、たくさんの国民がいる。そして国民の一人一人が違う知識を持っている。国家が一つの知識を

knowledge3.indd 281 2017/04/07 21:10:02

押しつけようとしても、頭のなかに入って行って一人一人の知識を書き換えることはできないから、国家には国民の数だけ違う知識が存在することになる。国家にとってそれはリスクになるから、国家は教育などによって知識の共有を計り、マスコミなどを使って知識の統一を進めてきた。ところがそのやり方が、うまくいかなくなってきている。

マーク・マロック・ブラウン（Mark Malloch-Brown）が言うとおり、国民国家の「国際的なことについての基本単位」という役割は、かつてない脅威にさらされている。国民国家は、国境など関係なく起こる気候変動にも、国をまたいで活動するテロ・グループにも、国を越えて押し寄せてくる難民にも、有効な手立てを打てずにいる。「国民の忠誠と交換に、安全と福祉を提供する」という国民国家の役割も、もう有難みのあるものではなくなってきている。

宗教とか民族といった古くからの枠組みで結びついている人々に加え、ビジネスとか学問といった共通の目的を持っている人々、環境とか人権といった同じような問題意識を持っている人々、その他様々な興味や利害に基づいて出来上がったグループには、国境がない。人々は国民である前に何らかのグループの一員であり、グループへの忠誠は持てたとしても、国家への忠誠は持つことができない。そんななか、旧来のように「国家と共に生きる」のか、それとも「複数のアイデンティティとともに生きる」のか。逆にいえば、「国家のために生きる」のか、それとも「個人を尊重する」のか。これは定められたことではなく、選択ではないか。

東郷克己は「脱藩」ならぬ「脱国」を口にするが、私は心情的には、すでに「脱国」している。私の忠誠は国家にはない。

姜信子は「国民」とは、「日々更新される『均質な情報空間』に生きる者」だという。みんなが同じことを知っ

knowledge3.indd 282 2017/04/07 21:10:02

ていて、同時に同じことを知らないという意味での、「均質な情報空間」だ。マスメディアがその情報空間を作り出している。そして国家は、マスメディアを管理・統制することで、情報をコントロールする。

姜は、「個人が誰の管理や統制も受けずに、インターネットのような新しいメディアを通して情報の発信をできるようになってきた今では、国境に囲まれた『均質な情報空間』にだいぶノイズが入りつつありますが・・・」と書いている。この「ノイズ」が大きくなれば、情報空間におけるマスメディアの比重が減る。つまりは、国家が管理・統制できる情報の比重が減ることになる。

インターネットと共に押し寄せてきた多様化の波は、しばらくのあいだ、姜の言う「均質な情報空間」を洗い流したかのように見えた。でもそれがうわべだけのことだと気づくのに、さほどの時間はかからなかった。自由を勝ち取ったはずの人たちは、似たような生活スタイルで似たように暮らし、似たような情報を得て似たようなことを言っている。インターネットの普及は、「多様な情報空間」を作り上げることなく、もうひとつの「均質な情報空間」を作り上げただけ。気が付いてみればそこにも、自由はなかった。

日本では「多様な情報空間」など、望むべくもない。インターネットさえも流行のひとつとして扱われ、村上春樹の言う「文化的焼き畑農業」に取り込まれてしまった。自分たちが自由だと信じ、自分たちの文化に多様性があると言う人たちの、なんと均質な、なんと似ていることか。

私は、多様性のある自由なところに行きたいと思っている。それは情報の砂漠のなかにはないし、情報の洪水のなかにもない。もしかしたらそれは私のうちにあるのかもしれないし、もしかしたら地球上のどこかにあるのかもしれない。そこには、求め続けてさえいれば、いつか辿り着く。そう信じている。

knowledge3.indd　283　2017/04/07　21:10:02

公務員的知識

会社に社員がいるように、国家には公務員がいる。会社の財政状況が悪くなったときには、社員は資金繰りの状態を確かめ、事業展開を見直し、必要であれば売上を増やすとか人員を削減するなどの努力をする。国家の財政状況が悪くなったときに、公務員が同じことをするだろうか。自分たちで収入を増やしたり、人員を削減したりするだろうか。

公務員が長年にわたって作り上げる組織。そしてそれを守る制度。それは公務員の生活を保障する代わりに、国家の弊害となり、国民の重荷になる。組織が肥大化し公務員が増えているという批判をかわすために、「役所でない役所」と「公務員でない公務員」というものを考えだし、紙の上では増えていなくても、実質は増えているという状況を作り出すのは、どこでも同じ。「なくてもいい書類」と「なくてもいい仕事」は増え続ける。

国家という運命共同体の運営を任されている人たちが、自分たちのことを優先して考えるようになってしまえば、国家はたち行かなくなる。制度がそれを運用する人によって都合良く変えられ、免許が増え、検査が増え、罰金が増え、税金が増え、国民の負担がある限度を超えてしまえば、国民は制度を信じなくなり、守らなくなり、しまいには逃げ出す。逃げ出さずに戦う人たちもいる。私たちはそんなことを、いやというほど見てきた。

借金を抱えてしまった国家に、なにができるだろう。収入を増やすことができず、支出を減らすことができないとしたら、カネをもてあそぶしかない。例えば、金利を減らす。そうすれば借金はそんなには増えない。金利をマイナスにすれば、借金は減る。為替を操作し、自国の通貨の価値を落とすのも手だ。そうすれば、他国から見ると、借金が減ったように見える。奥の手はデフォルト、つまり国家の債務不履行を行えば

knowledge3.indd 284 2017/04/07 21:10:02

債務はなくなる。もちろん誰かにその借金の肩代わりをしてもらえれば、それに越したことはない。

個人の場合でも、借金は多いほうがいいと言う人もいるが、やはり借金はないほうがいい。国の借金は仕方ないというが、本当に仕方ないことなのか。「借金はないほうがいい」という知識を選び取っていれば、借金など抱えることはなかったのではないか。

為替取引

西田明弘の為替取引のことを書いた文章がとてもわかりやすい。専門用語が少ないせいかもしれない。しかも、なかなか示唆に富んでいる。

国際決済銀行（BIS）の報告書によれば、２０１６年４月の為替取引高は、１日平均で5・1兆ドル。日本の年間GDPは約4・7兆ドルなので、日本国内で1年間に生み出される付加価値を上回る規模の為替取引が1日で行われていることになるという。年間の為替取引高は１２７５兆ドル。一方、２０１５年の世界貿易の額は１６・5兆ドル。外貨や外貨建て資産への投資など、貿易以外の為替取引がいかに大きいかがよく分かる。

でも、実需の取引とFX取引とを単純に比較するわけにはいかない。FX取引には、０・1秒単位で売り買いを繰り返すことで、結果として資金の流れがほとんど発生しないようなものも含まれる。だから、為替相場に対する実需の取引の影響力が小さいとは言い切れない。

為替取引は1日24時間、世界のどこかで行われている。土日や休日には取引は行われない。為替取引高は、ロンドン市場が開くころに取引高が増え始め、ニューヨーク市場が開いて、ロンドン市場が閉まる直前にピー

knowledge3.indd　285　2017/04/07　21:10:02

クに達するという。逆に、取引高が極端に細るのが、ニューヨーク市場が閉まり、東京や香港、シンガポール市場が開く前の2時間ほどだ。シドニー市場が開いているが、参加者は非常に少なく、取引高はピーク時のわずか2％に過ぎない。アジア時間の取引が最も活発な時間帯でも、ピーク時の4分の1程度だという。

イギリスの国民投票でのＥＵ離脱決定やアメリカの大統領選挙の結果が判明したのが、日本時間の平日昼間であり、東京市場を直撃した。その結果、ＥＵ離脱決定ではポンドが、大統領選挙の結果判明ではドルが急落した。ピーク時に比べて市場参加者が少なかったため、為替相場の変動を大きくした可能性があるのだそうだ。

逆にトルコのクーデター未遂は、現地時間の金曜日の夜に発生した。ニューヨーク市場でトルコリラは売り込まれたものの、残された取引時間が短かったことが、リラ暴落の回避につながったという。クーデターは週末のうちに鎮圧されたので、週明けの世界中の市場では落ち着いた取引となった。

西田は、為替市場に影響を及ぼすイベントも、その発生タイミングによって影響の度合いが大きく異なるという。こういう知識は意外とどこにも書かれていない。為替市場のことといえば、どうしたら儲かるかという目先の情報ばかり。私は西田が書いた様々な文章から、たくさんのことを学んだ。「読んだことがすぐに知識になる」という感じにさせる文章は、すごい。

プロパガンダの知識

今の世の中はプロパガンダで溢れている。国家によるプロパガンダ、政党によるプロパガンダ、宗教によるプロパガンダ、企業によるプロパガンダなどなど、「人のいるところには、プロパガンダがある」と思え

knowledge3.indd 286 2017/04/07 21:10:03

るほどに私たちの周りはプロパガンダでいっぱいだ。目的はさまざまで、国民を誘導するため、選挙に勝つため、信者を増やすため、商品をもっと売るため、考えを広めるため、騙すためと、実に多岐にわたる。そんなプロパガンダが、インターネット、テレビ、ラジオ、新聞、雑誌、書籍、映画などを使って流されるのだからたまらない。私たちのなかでプロパガンダの影響を受けていない人は、ひとりもいない。

困ったことに、人がプロパガンダに影響されているのを指摘できる人も、自分が同じように影響されていることには気付かない。もっと困ったことに、プロパガンダを流すのが仕事だという人が、他のプロパガンダには簡単に誘導されてしまう。そういうことを、どう理解したらいいのだろう。

昨今のプロパガンダは、カネがかかっている。そして洗練されている。でも、それだから誘導されるわけではない。プロパガンダの手法は、実はあまり変わっていないのだ。基本に忠実なプロパガンダほど、効果があるとも言われる。「プロパガンダについての知識があれば、誘導されることが少なくなる」などとは言わないが、知識はないよりはあったほうがいい。

ということで、プロパガンダの基本を紹介したいと思う。ドイツ軍がポーランドに侵攻し第二次世界大戦が始まった1939年に、アメリカの「プロパガンダ分析研究所（Institute for Propaganda Analysis）」が「どうしたらプロパガンダを見破ることができるか」ということを人々に教えるためにまとめた『7つのよくあるプロパガンダの手段（seven common propaganda devices）』だ。

- レッテル貼り（Name Calling）　他の製品や人に悪いレッテルを貼り、それを繰り返し宣伝する
- 普遍化（Glittering Generalities）　製品や人を、特別な言葉と関連づけ、素晴らしいと錯覚させる
- すりかえ（Transfer）　好感度の高いものや「たとえ話」で反感を回避し、共感を得る

knowledge3.indd 287　2017/04/07 21:10:03

・権威付け（Testimonial）　権威や有名人とのつながりを見せ、正当性や有用性を信じさせる
・普通化（Plain Folks）　普通の人やその価値を利用し、安心感や親近感を与える
・カード・スタッキング（Card Stacking）　情報操作（不当な比較、隠蔽など）により実際よりも良く見せる
・バンドワゴン（Bandwagon）　他の人もそうしているからと、利用や参加を促す

このような方法に加え、次のような方法も使われるようになる。

・断言（Assertion）　言い切ることで、信頼感を増し、説明を不要にする
・ましな方の選択（Lesser of Two Evils）　より悪いものを見せて納得させる
・敵の設定（Pinpointing the Enemy）　特定の人物や組織を敵として仕立て上げ、複雑な状況を単純化する
・ステレオタイプ化（Stereotyping）　複雑な事案を単純化して誘導する

こういった方法が今でも使われているのは、もちろん有効だからだが、それぞれの方法が進化し、洗練し、変化してきたことを忘れてはならない。古典的な方法なのになぜか気付かれず、プロパガンダが言葉や映像のなかに仕組まれる。注意すれば気付きそうなものだが、多くの人がプロパガンダに誘導される。

もっとも新しいタイプの人工知能（ＡＩ）を使ったプロパガンダは、今までのプロパガンダとはなにもかもが違う。人工知能を使ったプロパガンダ作成システムは、学習し、よくなり続ける。そもそもシステムの前提が「仕組まれたプロパガンダが見破られないこと」だというのだから、もうどうしようもない。怖い世の中が来たものだ。プロパガンダを前にして知識は無力だ。何の役にも立たない。

knowledge3.indd 288 2017/04/07 21:10:03

知識と社会

そこで暮らしたくなるような小さな街とは、どんなところだろう。静かで、緑が多くて、効率的な公共交通機関に恵まれていて、いいものが買える店があって、おいしいレストランがあって、スポーツ施設があって、図書館があって住みやすい街。そんなところがあったら、そこで暮らしてみたい。

そこで働きたくなるような大きな都市とは、どんなところだろう。何百万・何千万の人が集まり、活気に満ちていて、チャンスが転がっていて、たくさんの仕事とたくさんの情報があり、世界中に繋がっていることを感じさせてくれる都市。そんなところがあったら、そこで仕事をしてみたい。

そこで暮らしたくなる、そして働きたくなるような場所とは、どんなところだろう。一つの通りは喧噪に満ちていて、もうひとつの通りは静けさに包まれている。一つの通りにはビジネスビルが建ち並び、もうひとつの通りには緑があふれている。争いがなく、みんなが好きなことをしている。子供たちが安全に育つことができ、老人たちが疎まれることなくすごせるところ。そんなところはないのだろうか。

誰も管理などという言葉を口にせず、誰かを見張るというような考えを持たず、自由に考えていることを言える社会。ゴミを散らかす人やモノを壊す人がいない社会。それはただの夢なのか。

アメリカの都市のように「ここにはヒスパニック系の人たちが住み、ここにはアフリカ系の人たちが住む」というような住み分けをするのでなく、ブラジルの都市のような「ここには金持ちが住み、ここには貧しい人たちが住む」という住み分けもない、誰もが住みたいところに住んで快適でいられる都市が、どこかにないものだろうか。

knowledge3.indd 289 2017/04/07 21:10:03

国連機関

国連とそのまわりには、いろいろな組織があって、それはまるで国家の映し鏡のようだ。国家のことは、政治的な立場や考え方が邪魔をして、なかなか客観的に見ることができない。そこで、国家という生々しいものを、国連機関のことを考えることで、少し客観的に見てみようと思う。

国連機関には大まかに分けて４種類の仕事がある。継続的な開発支援、災害や紛争が起きたときの緊急援助、人に寄り添う仕事、そして全体を眺める本部の仕事。どの仕事も重要で、どの仕事がより大事だということはない。

農業や食糧のことを考えるとわかりやすい。継続的な農業支援のために種や道具などを送るのがＩＦＡＤ、災害や紛争からで困っている人たちに食べるものを送るのがＷＦＰ、難民に送った食糧が一人一人に届くよう調整するＵＮＨＣＲなどの機関、そして農業全体のことを考え調整するのがＦＡＯ。そのどれが欠けても困ることは多い。

現場で頑張っているから偉いとか、本部で良い暮らしをしているからけしからんとか、そんな単純なことではない。それぞれに違う仕事なのだ。

カネ計算のできない人には継続的な開発の仕事はできないし、判断ができずプライオリティがつけられない人には緊急援助の仕事は向いていない。思い入れが強すぎる人が人に寄り添う仕事をすれば悲劇が待っているだろうし、専門を持たない人が本部で働いてもなんの役にも立たない。

いろいろな人がいて、はじめて成り立つのが国連機関だ。大きすぎて見えないが、国家もまったく同じ。いろいろな人がいなければ成り立ちはしない。

knowledge3.indd 290 2017/04/07 21:10:03

化学の知識

人工甘味料のことを、大西睦子がうまくまとめている。日本とアメリカで認可されている人工甘味料は、サッカリン、アスパルテーム、アセスルファムカリウム（アセスルファムK）、スクラロース、ネオテームの5つ。甘味についていえば、サッカリンは砂糖の200～700倍、アスパルテームは160～220倍、アセスルファムKは200倍、スクラロースは600倍、ネオテームは7千～1万3千倍だという。

サッカリンはいちばん古くからある人工甘味料だ。1970年代後半にその発がん性が疑われ世界中で使用禁止となったため、1990年代に入って安全性が確認され使用許可が出たあとも悪いイメージが残り、アメリカや中国で大量に使用されるようになっても、日本ではあまり使われていない。その代わり、他の人工甘味料がどんどん使われるようになったという。

大西は「カロリーゼロ」「無」「ノン」「レス」「フリー」「糖質ゼロ」「糖類ゼロ」というような表示に騙されてはいけないという。そして、人工甘味料の「体内に脂肪を蓄える」「味覚を鈍化させる」「依存性がある」というような作用を説明する。もっとも、「アスパルテームは体内で代謝されたときにフェニルアラニンやアスパラギン酸、メタノールに分解されるのだが、過剰なフェニルアラニンやアスパラギン酸は、神経伝達物質のセロトニンやドーパミンなどを作るためのチロシンやトリプトファンが脳へ送られるのを妨害する。それで神経伝達物質が減り、うつ症状が現れる」というような説明は、私にはなんの意味も持たない。「おいしくてカロリーを抑えられるという『うまい話』はない」と言われてうなずくという情けない状態になる。

実は私にはなにもわからない。『ネイチャー（Nature）』に「人工甘味料が腸内細菌に作用して代謝異常を起こす」という記事が載ればそれを信じ、その記事に書いてあることは誤りだと言われれば今度はそれを信じる。知らないということは怖ろしい。

knowledge3.indd 291 2017/04/07 21:10:03

人工甘味料の天然に存在しないものはたくさんある。『ＦＩＮＥ編集部』のウェブページには「合成着色料危険度表」が載っていて、石油製品を原料に化学合成して作られた着色料の怖さを語りかけてくる。「赤色２」は、ゼリーや冷菓菓子などの食べ物や、清涼飲料水やシロップなどの飲み物に含まれていて、「発がん性」「妊娠率の低下」「じんましん」などの原因となり、アメリカやヨーロッパでは使用が禁止されている。そう言われてこのコールタール由来の着色料が含まれるものを買う人はいない。知識がないから買うのだ。

『生活の知恵どっとこむ』は、食品添加物についての注意事項を書き並べる。アスパルテーム、アセスルファムカリウム、スクラロースなどの人工甘味料については、合成した甘味料で甘みをつけることが体にいいわけはないという。カラメル色素（発癌性）、○色○号（コールタール）、コチニール色素（虫から抽出）などの着色料・発色剤については、あの毒々しい色をしたものを体のなかに入れるなんてどうかしているという感じだ。

おにぎりの形が何日たっても変わらないのも、ハンバーガーのお見た目が何か月たっても変わらないのも、発がん性のある「安息香酸」「安息香酸ナトリウム」や、肝臓・腎臓に悪い「ソルビン酸」「ソルビン酸カリウム」といった保存料のおかげだ。また、スナック菓子を食べ始めると、途中でやめられなくなるのは、グルタミン酸ナトリウムという旨味調味料のせいだという。

食べ物や飲み物についてもっと知るということはどうにかできるかもしれない。食品表示をよく見ることもできるだろう。でも、ありとあらゆるものに人工甘味料、着色料、発色剤、保存料、旨味調味料といったものが含まれてしまっているなかで、そういったものと無縁で暮らすことはできない。食べ物や飲み物だけではない。歯磨きペーストやシャンプー、リンスなどにも、そして洗剤や化粧品にも、着色料、発色剤、保存料といったものが含まれている。

knowledge3.indd 292 2017/04/07 21:10:03

「いつかはみんな死ぬ。だからそんな細かいことは気にするな」という友達がいる。でも私は、そういったことがとても大事なことのように思える。「植物が仕込んだ毒によって恐竜が滅んだ」という説があるように、「人間は自分たちが仕込んだ毒によって滅んだ」という説が出てくるかもしれない。その時になって後悔しても遅い。

戦争と革命

戦争と革命について、２つの引用句がある。

・誰が敵かを政府が教えてくれる時、それを戦争と言う。
(War is when your government tells you who the enemy is.)
・誰が敵かを自分で考えて決める時、それを革命と言う。
(Revolution is when you figure it out yourself.)

引用句と言っても誰の文章を引用したのかはわからない。政府の言うことを聞いて戦争に駆り出されて死ぬのも、正義だと信じて革命に身を投じて死ぬのも、死ぬことには変わりない。

戦争は勝ったほうが正しい。負けたほうには正義はない。革命は成功すれば英雄。成功しなければテロリスト。勝てば官軍。負ければ賊軍。原爆は落としたほうが正しい。落とされたほうが悪い。そんなことをしたり顔で言う知識人が、テレビに映っている。

knowledge3.indd　293　2017/04/07　21:10:03

原爆を落としてなければ、もっとたくさんのアメリカ人が死んでいた。原爆を落としたおかげで戦争が終わった。そんなことを言うアメリカ人が、私の知らないところにいる。

原爆を作ってしまったら、それを使いたくなって広島と長崎に落とした。終戦後すぐにＡＢＣ病院を作り、助けに来る代わりに調査をしに来た。そんなことを言う私が、ここにいる。

戦争に勝った国が戦争に負けた国を統治するために、ダグラス・マッカーサー（Douglas MacArthur）がやって来た。アメリカに帰ったあとで在任中のこと回想し「私の軍事知識だけでは、もうなにもできなくなくなっていた。私は経済学者であり、政治学者であり、エンジニアであり、製造マネージャーであり、教師であり、神学者のような存在でなければならなかった」と言ったが、実際、マッカーサーは神だった。

スタンレー・ウェイントラウブ（Stanley Weintraub）が、『真珠湾のクリスマス（Pearl Harbor Christmas: A World at War, December １９４１）』のなかで、マッカーサーのプレスリリースの３分の２以上がたった一人のこと、つまり自分自身のことだったという。一人で何でも知っているということは、つまりペテン師だということだ。そのペテン師を崇拝し、帰米の時には大勢が見送りに行ったというのだから、負けた国の人たちのバカバカしさは、なんともやるせない。

マッカーサーは占領軍のトップにいた。それ以上でもなく、それ以下でもない。神なんかではないし、尊敬できるような人でもない。偉くなった人にありがちなナルシスト、そしてサイコパス。そんな人がその地位にいなかったら、負けた国のかたちはまったく違うものになっていた。そう思ってマッカーサーの顔写真を眺めていたら、占領軍がしたことのすべてをゴミ箱のなかに捨てたい気分になってきた。

knowledge3.indd 294 2017/04/07 21:10:03

優越意識と知識

ポール・グレアム（Paul Graham）が、アメリカの高校の「ジョック（Jock）」と「ナード（Nerd）」のことを上手に書いている。アメフトの選手に代表されるジョックと、スポーツ以外のことに興味を持つナードだ。ジョックと呼ばれる生徒たちが人気者なのに対し、ナードと呼ばれる生徒たちはいじめにあうという。

グレアムは「ナードであることと頭の良さとは正比例し、ナードであることと人気とは反比例する」という。つまり頭の良い生徒たちは、人気がないばかりか、いじめられるというのだ。そういう現象はアメリカの中学と高校に限られている。他の国ではそんなことは起きないし、アメリカでも小学校や大学ではそういうことはない。

面白いのは、アメリカの文化人や知識人の多くが、高校ではナードだったということだ。政治家や実業家、発明家などにもナードだった人がたくさんいる。リベラルといわれる人の多くがナードだったということや、メディアで発言したり発信したりしている人のほとんどがナードだったということは、無視できない。

ジョックに人気があるのは、その強さ、明快さ、そしていい意味でのいい加減さや見てくれの良さのおかげ。そしてナードに人気がないのは、その真面目さや成績の良さ、論理的なところ、そしてオタクの一面などのせい。グレアムはそう説明する。

そういうステレオタイプの説明は、「ジョック＝無知」「ナード＝知識」というステレオタイプなイメージを作り出す。でもこれは、高校の時にいじめられたナードの、大人になってからの仕返しなのではないか。そして「大衆は、まじめな論理には耳を傾けない」という、「ナードだった知識人たち」の「ジョックだった大衆」への「上から目線」と同じではないのか。

インターネットは情報を、みんなのところに届けるようになった。一部の知識人だけのものだった知識は、

knowledge3.indd 295 2017/04/07 21:10:03

努力さえすれば誰でも得られる環境が整った。にもかかわらず「ナードだった知識人たち」の優越意識はいつまでたっても消えない。

知識は本当にみんなのものになったのだろうか。

元電通社員で、「はあちゅう」という名前で発信を続けている伊藤春香が、

電通の先輩が、

「CMは偏差値40の人にも理解できるものじゃなきゃダメ。この会社にいる時点で普通ではないと自覚しろ。世間にはおそるべき量のおそるべきバカがいる。そしてそれが日本の『普通の人』だ」

って言ってたの、一番役に立ってる教えの一つだ。

とツイートした。

また、元NHK社員で、経済学者として発信を続けている池田信夫は、

私がNHKに勤務していたころ教わったのは、「典型的な視聴者は、50歳の専業主婦で高卒だと思え」ということだった（politically incorrect だが）。

たぶん民放はもっと低く設定しているだろう。それが市場メカニズムでは正解である。1億人の知的水準の平均値は、当ブログの読者には想像もできないぐらい低いのだ。

とブログに書いた。古舘伊知郎を批判するなかでの文章だ。

knowledge3.indd 296 2017/04/07 21:10:03

伊藤が書いた「電通の先輩から教わったこと」と、池田が書いた「ＮＨＫに勤務していたころ教わったこと」は、広告代理店と放送局の違いはあるにせよ、基本は同じ。電通社員にとって普通の人は「おそるべきバカ」で、ＮＨＫ職員にとって典型的な視聴者の知的水準は「想像もできないぐらい低い」のだ。

自分たちが見下す存在に向けて広告を作り、番組を作る。その結果、作られる広告は「おそるべきバカ」を騙すものになり、作られる番組は「知的水準の低い視聴者」を誘導するものになる。騙しや誘導がうまくいこうといくまいと、そんな広告やそんな番組を見せられた人たちの知識は歪められてしまう。

電通社員やＮＨＫ職員の優越意識は、「ナードだった知識人たち」の優越意識と何の変わりもない。自分の知的レベルが高いという優越意識を持っている人たちは、なぜか、自分たちの知識の量が多く、知識の質が高いという優越意識も持っている。だから自分たちには、知的レベルが低く、知識の量が少なく、知識の質が低い人たちを、助け、導く役割が与えられているのだと思い込む。それが、騙し、誘導するという結果になる。

インターネットの普及と共に20世紀型の知識人たちがその役割を失っていったように、現在優越意識を持って活躍している人たちも、やがてその役割を失ってゆく。その兆候は、もうあちらこちらに出てきている。

パブリック・リレーションズ

エドワード・バーネイズ（Edward L. Bernays）のパブリック・リレーションズの説明が面白い。「パブリック・リレーションズは、応用社会科学だ」という。うまく共感できれば、行動と政策に影響を与え、意見や態度を作り出し、個人や集団を動かすことができる。その究極の目的は、説得すること、説得が行動を生む

knowledge3.indd 297 2017/04/07 21:10:03

こと、そして行動が公共の利益になることだという。

パブリック・リレーションズの仕事が大きなものでも小さなものでも、みんなの利益になるものでなければ成功はしない。そういうバーネイズの考え方は、理想的すぎるかもしれない。でも長い目で見れば、自分の利益だけを考えたパブリック・リレーションズより、みんなの利益を考えたパブリック・リレーションズのほうがうまくいく。バーネイズは決して間違ってはいない。

knowledge3.indd 298 2017/04/07 21:10:03

5・4　知識と宗教・科学

石川幹人は「心とは何か」という疑問について書くなかで、「私たちは、まだ、知識が語れるほどには進化していない」と言う。哲学といい心理学といったところで、そしてまた認知科学がモデル理解という方法論を確立したからといって、「心とは何か」という基本的なことにすら答えられないでいる。ある意味私たちは、なにもわかっていない。

科学といって胸を張ったところで、大きな自然の営みのほんの一部を、科学者という職業を持った人たちが、自分たちが信じている方法で説明しようとしているにすぎない。もっともらしい数式を並べたとしても、それで自然のすべてを説明できるわけはない。

科学を信奉する人たちは、宗教の持つ非科学性を糾弾し断罪する。ただ、よく観察してみると、宗教が科学に置き換わったところで、なにも変わっていないことに気付く。宗教を妄信する態度はそのまま科学を妄信する態度に引き継がれ、教えられたことをそのまま正しいものとして受け入れる態度は、宗教も科学も変わりがない。

私たちは相変わらず、似たようなことを繰り返している。

知識と宗教について、また知識と科学について考えることは、知識の本質を理解するために、避けて通ることはできない。

knowledge3.indd　299　2017/04/07　21:10:03

知識と宗教

アンジェイル・ロジャーズ（Anjail Rogers）が、宗教における知識の大切さについて書いている。宗教の中心には、信じるということがあって、その信じるということを続けようと思えば、知識を持たなければならないという。

私は宗教の側から知識ということを考えたことがなかったので、はじめはロジャーズの書いていることが頭に入ってこなかったが、読み進むうちに、なるほどと思うようになった。客観性とか合理性とかいうことが知識によって正当化されるのが、宗教なのだ。真理は、信じているから真理なのではなく、知識によって真理となる。宗教の知識とは、そういうものらしい。

神話は歴史の一部になり、信じる人たちによって正当化される。たとえそれが荒唐無稽な話だったとしても、体系的な知識が神話を正当化する。宗教というものは、信じていない人にとっては、厄介なものだ。

アルトゥル・ショーペンハウアー（Arthur Schopenhauer）は、宗教の持つ寓話的性質を悪いと言った。宗教自らがそれを作り話だと認めてしまわない限り、自分たちの隠し持つ嘘に縛られ続けてしまうというのだ。ただ実際、どの宗教でも、ありもしないことが教義のなかにまで入り込んでいて、ひとつのことを作り話だと認めると、全体が揺らいでしまう。それは、本当であり、本当ではないという、ややこしい状況が出来上がってしまった。

人は、不条理なしにはやっていけない。幻想は不可欠だ。人とは所詮、そういうものなのだ。ショーペンハウアーは、観察者に徹する。

話は飛ぶが、ある日私は、タジとガブリエルという2人のシステム・エンジニアと食事をしていた。2人ともとても優秀で、論理的な思考回路を持ち、グローバルな環境に適合していた。タジはムスリムで、ガブ

knowledge3.indd 300 2017/04/07 21:10:03

リエルはカトリック教徒。それに対し私はアグノスティックで、「神がいるかどうかなんて、人間にわかるわけがない」という考えを持っている。

ガブリエルは「天国は、神に限りなく近いところだ」と言った。それに対してタジは「天国には、その人が好きな人や居てほしい人だけがいる」と言った。私は、イスラム教の天国のほうがいいなあと思いながらも、そのことは口に出さないでいた。食事のあいだじゅう、2人の「信じること」と、私の「考えること」とは、穏やかな距離を保ち続けた。

宗教は信じること。だから、神話なり聖典なりそして教典なり経典なりに寓話的性質があったとしても、それが実際にあったかどうかは問題ではない。信じるかどうかの問題なのだ。

ショーペンハウアーから見て不条理なことも、そして幻想も、2人にとっては真実でしかない。ショーペンハウアーの言う通り、人とは所詮、そういうものなのだ。

神の存在

ウィキペディア（Wikipedia）が、神の存在についての結論は、2つの軸によって表され、ひとつの軸は信じるかどうかという軸、もう一つの軸は知っているかどうかという軸だという。

信じるかどうかという軸には「有神論（theism）」から「無神論（atheism）」まで信じている度合いが示され、知っているかどうかという軸には「グノスティシズム（gnosticism）」から「アグノスティシズム（agnosticism）」まで知っている度合いが示される。グノスティシズムについてはいろいろな考え方があるが、ここでは神に存在について知っているという意味合いなのだろう。アグノスティシズムは、神がいるかどう

knowledge3.indd 301 2017/04/07 21:10:03

かなんて人間にわかるわけはないというそういう立場だ。

そして2つの軸で表される点が、神の存在ということになる。例えば有神論とアグノスティシズムの度合いがそれぞれに高いと、「神はいるかもしれないが、そんなことは人間にわかるはずがない」となり、また無神論とアグノスティシズムの度合いがそれぞれに高いと、「神はいないかもしれないが、そんなことは人間にわかるはずがない」となる。ただ単に無神論とかアグノスティシズムとか言うより、立場がより一層明確になっていい。

もちろん3つ目の軸や4つ目の軸があってもいいわけで、実際いろいろな軸が提案されている。軸を使うと、いろいろな立場が明確になるばかりでなく、白黒でないグレーのエリアが大きく浮かび上がり、とてもいい。「神はいる」「神はいない」でなく、「神はきっといる」「神はたぶんいる」「神はもしかしたらいるかもしれない」「神はいるかもしれないし、いないかもしれない」「神はもしかしたらいないかもしれない」「神はたぶんいない」「神はきっといない」というような感じが出せるのだ。

神の存在についての立場はいろいろあって、「神の存在について疑問を持つこと自体、意味がない」とするイグノスティシズム（ignosticism）や「神の存在についての疑問なんて、実際的な重要性がない」とするアパセイズム（apatheism）のほか、それぞれにこだわりのある立場があり、議論の余地はあまりない。

そしてそれぞれの立場の人が、それぞれに知識について話すから、宗教と知識のことは、まとめることができない。

そんなことを読んでいたら、人の数だけ宗教があり、人の数だけ神がいるように思えてきた。同じ宗教を信じ、同じ神を信じているといっても、それはおなじではない。そんな気がしてきた。

knowledge3.indd 302 2017/04/07 21:10:03

日本の仏教における知識

吉岡棟一によって書かれた『禅』という本が１９７６年に出版された。そのなかに知識という言葉が出てくる。仏教の言葉としての知識ではなく、明治時代に輸入されてできた知識である。

知識というものは、客観的に煮つめられたものだから、普遍的で、一般的で、共通性がある。どこにでも通用する、だが、そこに落し穴がある。知識には個性がない。まるで、百科辞典みたいなものだが、専門書ではない。知識ではおのれが生まれない。知識に飼いならされた人は、坐禅を概念としての存在を認める。坐禅は、正思惟であるから正しい思惟であるとか、静慮であるから、静かに慮ることだと理解する。だが、このようなことは、知識とか文字にはあるが、実在はしないのだ。そうではなくて、坐禅をする、座禅にうちこんでいくと、こんこんと湧く泉につきあたる。かつてない新しい体験である。

ここで使われる知識という言葉は、つまり、考えるということにつながるのではないか。すること、信じることが禅なのであって、考えただけでは禅とは言えない。そんなことだろうか。

とまあ、そんなことを考えていたら、長念寺のサイトに、「知恵と知識」という法話が載っているのを見つけた。

知恵とは、物事を正しく判断して処理する心の働きをいいます。私たちにとりましてもとても大切な心のはたらきです。しかし、今では「知恵」より「知識」という言葉を多く聞きます。現代社会のなかで、知識偏重の風潮が主流を占めているからだと思います。しかし、知識が豊かなひとが知恵を持っているとは限りません。私たちは、社会を勝ち抜く豊富な知識を持った人達でも、知恵が無かったのだなあと思われるような事件をしばしば耳にすることがあります。もともと知恵というものは学んで得るものではないようです。「生活の知恵」という言葉がありますが、学校で学ばなくても自然に身につく知恵があったのです。と

knowledge3.indd 303 2017/04/07 21:10:04

ころが、それがいつの間にか、知識にとって変わられてしまいました。現在では、技術を伴う職業でさえ、机上の知識でまず免許や資格をとり、それから経験を積むというパターンが定着してきています。私たち現代人は、インターネットなどから情報を知識として受け入れていきます。インターネット上には溢れんばかりの情報があります。便利ですが、一方的な情報にさらされるのみです。私たちは、もっと生活の知恵を磨くことに神経を使わなければならないのではないかと思います。

吉岡棟一は曹洞宗、長念寺は浄土真宗と、宗派や考え方はまったくと言っていいほど違うが、なにか通じるものがある。

宗教と批判

ダライ・ラマ（Dalai Lama）は、「宗教の目的は自制すること、他人を批判することではない」というが、それではなぜ、中国を批判するのだろう。

結局は、「言うことと、やることとは、違う」ということなのだろうか。

メディスン・ホイール

サン・ベアー（Sun Bear）が書いた「メディスン・ホイール」の話は良く書けていて、文章から景色が浮かんでくる。木が一本もない丘がある。青空が広がる。そこにはそよ風が吹き、草が優しくそよぐ。草のないところに、大きな石が円環状に置かれている。石はまた、円環から円の中心に向かって、まるで車輪のス

knowledge3.indd 304 2017/04/07 21:10:04

ポークのように置かれている。そこはアメリカ先住民たちが残した神聖な場所で、その石の並びは「メディスン・ホイール」と呼ばれている。人々はそこで、太陽を拝み、月に祈り、季節の歌を歌った。

なにもわざわざアメリカ先住民の話をすることもない。私たちも似たようなことをしてきた。遠い昔、まだ神社が権力と結びつく前に、私たちの祖先たちは山や、海や、森を畏怖し、土や、水や、木に感謝して暮らしていた。そして、草が生い茂ったなかに草が一本もない場所を作り、そこを縄で囲い神聖な場所とした。そこは自然のなかにいる神を迎え入れる場所であり、人々はそこで拝み、祈り、歌った。

拝むこと、祈ること、歌うことは、とても自然なことだ。少なくとも知識が邪魔をする前には、人は拝み、祈り、歌った。ところが「神とはこういうものだ」とか「拝んだり祈ったりする時にはこうしなければいけない」などと言われ続けているうちに、拝むことや祈ることをしなくなり、歌うこともプロの歌い手に任せ、自らは歌わなくなってしまった。

知識と科学

ウィキペディアを読んでいると、科学はすごいものだと思ってしまう。光速は光が伝播する速さのことで、音速は物質中を伝わる音の速さのことだと書いてある。

光速は、真空中で秒速約30キロメートル。空気中ではそれより遅く、水中ではさらに遅くなる。水中でも光は強く水に吸収されるため、１００メートル先も見通せない。土中ではそもそも光は通らない。あらゆる情報や物質は真空中の光速よりも速く伝播することは不可能とされているが、光速よりも大きな速度が出現する物理的状況というのは数多く存在するという。

knowledge3.indd 305 2017/04/07 21:10:04

音速は、空気中で秒速３４０メートル程度だが、水中では秒速１５００メートル近く、氷中では秒速３２３０メートル近くにも達し、土中ではさらに速い。音は物質自体が振動することで伝わるため、物質の種類により決まる物性値の一種なのだそうだ。

光は真空中で速く伝わり、土中では伝わらない。音は土中では速く伝わり、真空中では伝わらない。小学校や中学校で習うことなのだろうが、こんなことを読んでいると、科学がなんでも解明できると思ってしまう。

でもそんなことはない。村山斉は「私たちはなにも知らない」と言う。私たちは宇宙と聞いて、星や銀河を思い浮かべる。でも星や銀河を形作るすべての元素のエネルギーは、宇宙全体の４・４パーセントでしかない。目に見える星や銀河は、宇宙のなかのほんの一部分で、残りはまったく見えない。私たちが知っている「原子」たちは宇宙の５パーセントにもならないのだ。残りは、約23パーセントを占める暗黒物質（ダークマター、dark matter）と、約73パーセントを占める暗黒エネルギー（ダークエネルギー、dark energy）だというが、暗黒物質や暗黒エネルギーがなんなのかは、誰も知らない。

科学だからといって、なんでもかんでも説明できると思ったら、大間違いなのだ。最新の科学をもってしても、わからないことは多い。というか、わからないことのほうが、はるかに多い。知識もそうだ。一人の知識などたかが知れているし、何人かが集まって知識を出し合ったところで、たいしたことはない。

それなのに「自然というものはすべて、数字や数式で表すことができる」と信じている人は多い。温度の変化や二酸化炭素の量といったわかりやすい数字から、気候のシミュレーションモデルのわかりにくい数式にいたるまで、ありとあらゆる科学的な知識が総動員され、自然が説明される。こじつけとしか思えない説明がなされても、数字や数式への信仰が、批判を鈍らせる。

knowledge3.indd 306 2017/04/07 21:10:04

非科学的な、しかも直観的な知識は、数字や数式で表すことができない。すると、その知識は誤りとされる。例えば「人口が必要以上に増えると、病気や災害や戦争で人が死に、バランスが取れる」という考えは、検討されることすらない。地図上で「人口増加が激しいところ」と「エイズの発症率が高いところ」が一致するといっても、相手にされることはない。数字や数式であれば何もかも信じ、そうでなければ何も信じない。そんな「科学的な」人たちは、限りなく宗教的だ。

ある大学の工学部のフォトボルタイクス研究室（太陽電池研究室、Photovoltaics Lab）の入口のドアに、

理論とは、すべてわかっているけれど、なにもうまくいかないときのこと。
実験とは、すべてがうまくいくけれど、誰もなぜだかわからないときのこと。
私たちの研究室では、理論と実験が組み合わされている。
だからなにもうまくいかず、誰もなぜだかわからない。

と書いてあった。ここでの理論と実験の関係は、知識と経験の関係によく似ている。知識と経験を組み合わせたからといって、なにもかもがうまく行くわけではない。

ウィル・デュラント（Will Durant）は、

感覚は、整理されていない刺激（sensation is unorganized stimulus）
知覚は、整理された感覚（perception is organized sensation）
概念は、整理された知覚（conception is organized perception）
科学は、整理された知識（science is organized knowledge）
知恵は、整理された人生（wisdom is organized life）

knowledge3.indd 307 2017/04/07 21:10:04

と言った。はたして「科学は、整理された知識」だろうか。

科学は、整理されることのない知識を、いつまでたっても捕まえきれないでいるのではないか。実際、今までに捕まえることができたのは、説明できる「論理的な」知識ばかり。そして「論理的でない」知識は、時に「科学的でない」といって退けられている。

菊地誠は、「論理的でない」科学を、「ニセ科学」といって切り捨てる。小気味よく物事に白黒を付けてくれる「ニセ科学」は、科学よりも科学らしく見え、なにも知らない人にとっては科学より受け入れやすい。でもだからといって、なんでもかんでも単純な二分法で割り切ってしまう「ニセ科学」に騙されてはいけない。科学があつかう事象は、簡単に白黒が付くほど単純ではないのだ。

菊地は「二分法は、思考停止に他ならない」と言う。まったくその通りだと思う。「良いのか悪いのかといった二分法的思考で、結論だけを求める風潮が、社会に蔓延しつつある」と続ける。「そうだ、そうだ」と思う。その後、「合理的な思考のプロセスを大事にするべきだ」と続く。よくわからないけれど、そうなのだろうなあと思う。

菊地が「ニセ科学」といって切り捨てているのは「二分法的な思考」であって、「論理的でない」知識を全部切り捨てているわけではない。そもそも、菊地の言っていることには、すべて賛成だ。

でも、と私は言いたい。科学と「ニセ科学」という分け方は、菊地の嫌う二分法ではないのか。その考え方そのものが、「二分法的な思考」ではないのか。そもそも科学と「ニセ科学」のあいだに、はっきりとした線が引けるのか。

そしてもっと大事なのは、論理的でない知識は、合理的でない知識は、科学的でない知識は、はたしてそ

knowledge3.indd 308 2017/04/07 21:10:04

んなにまずいものなのかということだ。論理的だからいい、合理的だからいい、科学的だからいいというのは、あまりにも宗教的ではないか。「少し前まではキリスト教を無条件に信じていたヨーロッパ人が、今では科学を無条件に信じている」というのに似てはいないか。

私は論理的でない知識が、とても好きだ。そしてそのことを、まずいとも悪いとも思っていない。

世界の豊かさ

ジュリアンバーバー（Julian Barbour）の世界観はとても好感が持てる。私たちが想像する以上に世界は豊かだという。科学がその豊かな世界を数学的に記述して、すべてを説明したつもりになり、わかったように思っていても、それは表面を引っ掻いただけのこと。ゲームのルールは古代の天文学や幾何学となにも変わっていない。科学は、何でも説明できるはずという、私たちの思い上がりで成り立っているのだ。

私たちの知識がどんなに豊かになっても、世界の豊かさには到底及ばない。

わからないこと

ショーン・マーティン（Sean Martin）は「時間の概念は、人間の記憶から出来上がった錯覚だ」という。今までに起きたことも、これから起きることも、すべて「今」起きているというのだ。

マーティンは、「ほとんどの人が時間のことをあまり考えないけれど、時間が順方向に動かなければならないという物理の法則は、どこにもない」という。物理の法則は、最終的には対称的になる。つまり時間は、

knowledge3.indd 309 2017/04/07 21:10:04

順方向に動くのと同じように、逆方向に動くことができる。
この考えに賛成はできない。でもそれは「私にはわからない」というだけのことなのかもしれない。

科学と発展

ジャン・ジョレス（Jean Jaurès）は歴史に目をこらす。17世紀の初め、日本では徳川幕府が始まった頃、教会から少しは解放された国のシステムが、ケプラーの、そしてガリレオの、自由な科学を可能にしたという。しかし一度真実が明らかになってしまうと、天文学は、そして自由な科学は、教会とか国とかに関係なく発展することになる。

たとえどこかの国が、そして宗教が、自由な科学を止めようとしても、その発展はもう誰の手のなかにもない。そういう意味では、科学は、そして知識は、国や宗教を超えるものとして登場したわけだが、４００年後の今、その進み方はもう誰にも止められないところまで来ている。

西原清一は、科学の発展を、誤りを修正する過程だと言う。科学の知識はいつも程度の差はあれ誤謬を含んでおり、常に不完全だというのだ。そこに科学の信頼性があるとも言う。

科学的アプローチとは、間違いのない知識や信頼できる方法を保証しようとするものだ。ところがそういうものは存在しないという考え方が、急速に拡がりつつある。

ビタミンCが風邪の予防に有効であるといえば、有効でないという人が出てくる。ビタミンCが癌の治療にいいといえば、いやいやビタミンCの摂り過ぎはある種の癌の原因になるという。日光浴はからだに良いと言ったか思うと、紫外線が肌に悪いと言う。

knowledge3.indd 310 2017/04/07 21:10:04

人間は脳の1割しか使っていないというのは本当で、人間は脳全体を使っているというのも本当で、暗いところで本を読むと目が悪くなるというのも、目は悪くならないというのも、どちらも嘘ではない。

そう考えると、間違いのない知識などない。現在は誤りでしかないものが、将来正しいと言われているかもしれない。確かに、科学の発展は、誤りを修正する過程でしかない。

ふじい（id:plousia-philodoxee）は、科学的であることにこだわるならば、科学的でないから誤りだと考えることは、まさに科学的に誤りだと言う。科学的に解明されていないことがらのなかには、将来科学的に解明されることも含まれる可能性があるから、ある事柄を今の水準の科学で説明できないからといって誤りと断定してしまうことは、科学によって新たに物事が解明される可能性を制限しかねないとも言う。

哲学と知識

リチャード・ローティ（Richard Rorty）は、哲学のコアは「知識論（theory of knowledge）」で、それこそが哲学を科学から区別していると言う。ローティの『『知識論』がなかったら、この近代科学の時代に哲学がどうなっていたか想像できない」という文章は、決して科学的ではない哲学が、科学万能の社会のなかで存在し続けていく難しさを、危機感を持って伝えている。

聖書が「真実は素晴らしい」と教えるからでもなく、ミルトンが「真実は常に勝つ」と示唆するからでもなく、真実は真実のなかで生まれ育つ。そう言うローティが、どんなことをも相対化して考える新しい環境のなかで思い描いた「知識なしの哲学」とは、いったいどういうものだったのか。知りたい。

フランス革命を経ようが、アウシュビッツを経験しようが、「不正を最小に」「平等を最大に」という理想

knowledge3.indd 311 2017/04/07 21:10:04

を実現する方法も見つからず、美しいものを作りだそうという試みもうまくいかず、私たちはまだ、普通の幸せを持つことさえままならないでいる。本当の意味での人間性がないところで、良識とか良心と呼ばれる私たちに備わっているはずのものさえも見えないなかで、哲学は、そして知識は、どんな役割を持つのだろう。

インテリの、インテリによる、インテリのための哲学なら、目的すら持てずに消えていく。そして知識は必要でなくなる。「哲学はなくならない」「知識は必要だ」というのなら、みんなに良い道筋を示し、社会を変な方向に向かわせないでほしい。哲学の持つ役割は、そして知識の持つ役割は、もう以前とは同じではないのだ。

戸田山和久は『知識の哲学』のなかで、「伝統的認識論の賞味期限は過ぎてしまったんじゃないのか」という疑問を投げかける。ローティが哲学のコアだと言った「知識の理論」は、「エピステモロジー(epistemology)」とも呼ばれる。古代ギリシャ語で知識を意味するエピステム(ἐπιστήμη)と理論を意味するロゴス(λόγος)がくっついた、文字通り「知識論」という意味の言葉なのだが、日本ではドイツ語の「エルケントニステオリー(Erkenntnistheorie)」の訳である「認識論」という言葉が定着している。

戸田山は伝統的認識論のことを「どこまでも時代に既定された営み」だという。それがリアルな問題に感じられた時代は確かにあったろうが、科学や情報技術の高度化によって私たちの知識を獲得・処理・利用する仕方が大きく変わり、知識のあり方そのものが変わってしまった今、認識論も変わらなければおかしいというのだ。

フレデリック・トゥーロン(Frédéric Teulon)は、「確かな価値なんてあるわけない」「客観性なんてみんな錯覚」「みんなが信じるのは文化のせい」といった「相対主義(relativism)」とか「ポストモダニズム(postmodernism)」と呼ばれる今流行の考え方がおかしいという。トゥーロンに代表される多くの人たちは、

knowledge3.indd 312 2017/04/07 21:10:04

必ずと言っていいほど「真実」とか「道徳」というような言葉を持ち出して、正しいものは正しいという。そして「盗み」とか「詐欺」というような言葉を使い、悪いものは悪いという。そういう人たちが「倫理的価値を強化しよう」とか「道徳教育を充実させよう」と言ったとき、戸田山の知識についてのまっとうな議論は残念ながら片隅に追いやられてしまう。

トゥーロンのような人たちは、相対主義もポストモダニズムもわかってはいない。自分たちの意見に沿わないものや、わからないものは、すべて流行のせいにする。そして、自分たちの価値を無条件に正しいと信じている。

岸田秀は「生きるための価値を求めるふるまいは、きわめてはた迷惑である」と書いている。生きるための価値なんて、幻想にすぎない。心の底から納得できる確かな価値などあろうはずがない。宗教間の対立も、国家間の対立も、民族間の対立も、すべて価値の対立に起因する。神を信じる。指導者を信じる。カネを信じる。価値のないものに価値を与え、それを信じる。人はなんて馬鹿げた生き物だろうという岸田の声が聞こえてくるようだ。

それがどんなものでも、その価値を信じている人は、信じない人を下に見る。それだけではない。今の社会では、人道主義を信じない、民主主義を信じない、人権を信じないなどと言えば、まるで人間でないように見られてしまう。

『ユニバーサル・デクラレーション・オブ・ヒューマン・ライツ（Universal Declaration of Human Rights）』は、日本語では「世界人権宣言」と訳されているけれど、ユニバーサルは「世界」ではなく「普遍的な」という意味だから、「普遍的人権宣言」と訳すべき宣言なのだ。つまりそこに書かれた人権という価値は普遍的なものだというのだ。「人権という価値は普遍的なものではない」とか「世の中に普遍的なものなどない」な

knowledge3.indd 313 2017/04/07 21:10:04

どと言える雰囲気はどこにもない。

世界中の人たちがその宣言を普遍的だと言っていても、「それは普遍的でない」と言える勇気を持つことができるか。ついでに言えば、ソフトウェアがそれを使う人の利益のために金融商品の売買をするときに「そこには倫理も道徳もない」と言えるかどうか。「積極的平和主義」という言葉が、ジョージ・オーウェルの『１９８４』のなかの「戦争は平和」という言葉と同じだと言えるか。

哲学の役割は、難しい言葉を操って人を惑わすというものではないはずだ。人がみんな、自分で考えること。自分の考えにもとづいて行動すること。他人の意見を聞き、それを尊重すること。そしてなによりも、自分だけの知識を持つこと。そういう様々なことを示すのが、哲学の新しい役割なのではないか。

そういう意味で、戸田山の『知識の哲学』のなかに綴られた平易な文章は、かすかな希望の光だと思う。読む者に否が応でも考えさせるスタイルと、なにごとも疑う態度が、哲学の将来を感じさせた。

科学は知識だった

ジャレド・ダイアモンド（Jared Diamond）は、科学（science）という言葉が、もともと知識を意味したと改めて指摘した。確かにラテン語では、科学のもとになる言葉の「スキーレ（scire）」は「知る」を、「スキエンティア（scientia）」は「知識」を意味する。

その上でダイアモンドは、物理学の手法だけを科学的だとする風潮に釘を刺す。科学とは知識全体を意味するのだから、生物学の手法や環境学の手法が物理学の手法と異なっているからといって、科学的でないというのはおかしいという。

knowledge3.indd 314 2017/04/07 21:10:04

こんなことを言うのは、なにか切実な理由がるのだろう。ダイアモンドは、エコロジーや進化生物学を専門分野としていて、その研究は歴史を抜きにしては成立しない。つまりそれは、天文学などと共に、広い意味での歴史科学に分類されるというのだ。そして、物理学、化学、分子生物学などの非歴史科学にはない難しさとして、手法、原因、予測、複雑さをあげている。

物理学では、知識を得るための一番の方法は実験で、「数あるパラメータを一定にしたり変化させたりすることによってデータを集め、それを分析する」という手法は確立していて、化学や分子生物学といった分野でもこの手法が有効であったために、それこそが科学であるということになってしまった。

ところが実験室での実験は、歴史科学のほとんどにとって、意味がない。銀河の形成を止めたり繰り返したりはできないし、ハリケーンや氷河期といったものも始めたり終わらせたりといった実験は出来ない。国立公園でハイイログマを駆除するなどはもってのほかだし、恐竜の進化の過程を再実行するなんていうことはマッド・サイエンティストの悪い夢でしかない。

歴史科学では、観察、比較、それにいわゆる自然実験といった他のやり方で、知識を得ていかなければならないのだ。直接のそして究極の原因の連鎖が、関心的となる。物理や化学などでは「究極の原因」とか「目的」とかいったことは意味がないが、そういったものこそが、生態系を理解するのに、特に人間の活動を理解するのに、不可欠だ。

ダイアモンドは、物理学の手法で得られる知識には限界がある、と言いたかったのだろう。そして今の科学を覆う煩わしさについて、いらいらしていたのだろう。論文の書き方などといったお作法の窮屈さ、実験データさえあればいいという欺瞞。いつの間にか出来上がった科学的なことという思い込みは、科学を宗教にしてしまう危険性をはらんでいる。

knowledge3.indd 315 2017/04/07 21:10:04

中立という理想

平川秀幸の価値中立性についての考察がとても興味深い。そう思った。ところが読んでみると、とても難しく読みにくい。そんなわけで、私の理解はたぶん間違っていると思う。以下は私が理解した平川の考察だ。

価値中立性は、科学技術にとって重要な倫理的規範だ。でもそこには問題が潜んでいる。価値中立性が、科学技術と社会との協働という現実を覆い隠し、科学技術に対する批判的な検討や議論を遮断してしまうというのだ。科学技術を社会的・政治的な真空地帯とすることで、「科学技術が社会に害悪をもたすのは、使い方が悪いからである」とか、「科学技術は善でも悪でもなく中立である」ということにしてしまう恐れが出てくる。

科学者のあいだには「科学の知識は社会の価値や利害とは無関係であるべきだ」という考えがある。価値や利害という不純物を科学に持ち込むことは自制しなければならないという考え方だ。でもそんな考え方は現実的ではない。実際「科学のなかに社会の価値や利害が反映されている」というのが現実だ。だからリスクを扱ったり議論したりするような場合には、「社会的価値や利害と科学とのバランスをどうとるか」が重要になるという。

私は科学者ではないから、そんな考え方が苦手だ。科学であろうとなかろうと、社会から隔絶して何かをすることなど不可能だと思っている。何かをすればそこには必ずステークホールダー(stakeholder)がおり、ステークホールダーの意見を無視して何かをするなど意味がないと考えている。そして科学が人のすることである限り、社会的な責任が付いてまわると信じている。

だから平川の「バランスが大事」という文章をフムフムと読みながらも、「バランスなんていらない」という思いは消えず、気持ちは限りなくモヤモヤとしていた。

knowledge3.indd 316 2017/04/07 21:10:04

ヘザー・ドウグラス（Heather Douglas）の『科学、政策、そして価値中立の理想（Science, Policy, and the Value-Free Ideal）』は、そんな私のモヤモヤを吹き飛ばしてくれた。

ドウグラスは、政策立案における科学の重要性を考えれば、価値中立の理想は拒絶されなければならないと主張する。価値中立の理想の代わりに、「科学的な論拠のなかに社会的・倫理的な価値を受け入れ、同時に科学の完全性を保護する」という新しい科学の理想を提言している。例えば中立性よりも安全性を重要と考えるような、建前よりも現実の問題を解決する方にプライオリティを置くような、そういうドウグラスの態度には清々しささえ感じる。

価値中立という理想は、ジョージ・オーウェル（George Orwell）の『１９８４（Nineteen Eighty-Four）』のなかの「戦争は平和である」というスローガンや、安倍晋三が唱える「積極的平和主義（proactive pacifism）」という言葉に似て、どこまでも空虚だ。

私たちは今、生命を作り出してしまったり、ＤＮＡを組み替えてしまったりする科学と一緒に生きている。科学に私たちの社会的・倫理的価値を反映させなければならない瀬戸際まで追い詰められている。価値中立という理想などというくだらないものを捨てる時が来ているのに、そのようなものにしがみつくのは、人間という種への背信行為でしかない。

死刑制度に反対する人たちは「人の生命を奪う権利は誰にもない」と言う。そして、それが議論になる。その議論が進んで、死刑廃止に辿り着く国がたくさん出てくる。

それなのに、私たちは科学者のしていることについて何も言わない。「人の生命を作り出す権利は誰にもない」とか「人のＤＮＡを書き換える権利は誰にもない」というようなことを言う人はあまりいない。

「科学それ自体が、悪にもなる」ということを忘れてはならない。

knowledge3.indd 317 2017/04/07 21:10:04

環境問題

カトリーヌ・ラレール（Catherine Larrère）が環境問題への考え方を大きく二つに分けている。自然を尊重しようという考え方と、人間の責任というテクノロジーに焦点を当てた考え方だ。その二つの考え方の違いがアプローチの違いを生み、環境会議を毎年のように開いても、話はなかなかまとまらないという。

自然を尊重しようというモラルを問うような活動は、実は宗教関係者が中心となっていて、科学的な考え方とは一線を画している。リン・ホワイト（Lynn White）がこの立場のことを書いていて、とても参考になる。自然は神が人間に委ねたもの。このキリスト教の考え方が、「人間の自然との関わり方で、なにが間違っているのか」という疑問の出発点になっている。焦点の当て方で、生命中心のアプローチ、環境中心のアプローチ、人間中心のアプローチと、アプローチの違いが生まれたが、どれもキリスト教的な考え方から生まれたという。

もう一つの考え方は、テクノロジーに焦点が当てられ、科学者や技術者が中心となっている。ジャック・エリュール（Jacques Ellul）は、テクノロジーをマスターしていないことが問題なのだという。テクノロジーが人の手を離れ、自動的に開発が進み、環境が破壊される。しなければならないのは、テクノロジーを人の手に取り戻し、プロセスのなかに環境保全の考え方を組み込んでいくことで、自然との関わり方を考えている場合ではないという。

環境危機を説明する方法として、尊重の倫理（自然環境倫理）と責任の倫理（テクノロジーの倫理）があり、それぞれがお互いを無視しているという。

でも、よく考えてみると、どちらの倫理もアメリカ的・西欧的だ。生命中心・環境中心といっても結局は人間中心というヒューマニズムからは離れられないし、テクノロジーといっても人間がすべてをコントロー

knowledge3.indd 318 2017/04/07 21:10:04

ルできるという価値観の枠を出ることはない。

西欧的な考え方を持つ人たちが主導権を握り、そこに西欧的な考えを持つ人たちのあいだで必ず持ち上がる「宗教と科学」の問題が持ち込まれる。そこに「開発途上国」の旗を掲げた人たちが入ってきて、環境の問題は政治の問題に変質してしまう。

環境の会議は、実は永遠にわかり合えない価値の対立であり、政治の交渉でもある。そんな会議を繰り返しているあいだにも、環境は人間にとってますます悪くなっていく。

教皇と沈黙

２００５年から２０１３年までローマ教皇だったベネディクト16世(Benedictus XVI)は、バイエルン・ミュンヘンが好きだったり、ベートーヴェンの曲をピアノで弾いたりと、いつまでもドイツ人らしさが抜けなかったが、言うこともまた、ドイツ人らしかった。

バチカンでは保守派として知られていたが、文章のなかに宗教的な色彩が薄かったように思えてならない。沈黙を礼賛する文章など、素晴らしいとしか言いようがない。

沈黙は、コミュニケーションに欠かせない。沈黙のないところに、内容豊かな言葉は存在しない。沈黙のなかでこそ、自分に耳を傾け、自分を理解することが可能になる。沈黙によりアイデアが生まれ、深みを帯びる。自分がなにを言いたいか、他の人たちになにを期待しているのか、より明確に理解できる。そして自分をどう表現するかを選びとる。沈黙にとどまることにより、他の人に、話したり表現したりするチャンスを与え、自分が言葉とアイデアとに縛られるのを防ぐ。そうすれば、お互いの言うことを聞こうとする空気

knowledge3.indd 319 2017/04/07 21:10:05

が醸し出され、より深い人間関係ができるようになる。愛、喜び、不安、そして苦痛は、沈黙のなかで伝えられる。実際、沈黙は特に強力な表現方法だ。情報が豊富にある場合、なにが重要かを知るには、沈黙は必要不可欠となる。沈黙は、知識を分け合うことを可能にする。

この「沈黙は、知識を分け合うことを可能にする」という物言いが、ベネディクト16世を際立たせる。

知識の転換点

私たちは今、大変大きな転換点にいる。そう考える人は多い。網野善彦は『日本の歴史をよみなおす』の中で、「日本の社会と自然とのかかわり方が、いろいろな意味で現在大変大きく変化しつつある」という。持っている知識がまったく違うものになり、自分たちを滅ぼし得る技術を手に入れてしまうと、江戸時代から戦後のある時期ぐらいまでは何の不思議もなく普通の常識であったことが、ほとんど通用しなくなった。そういう見方は、１９２８年生まれの網野にとってごく自然なものだったに違いない。

現在の転換期に忘れさられようとしている社会、消滅しつつある社会は、だいたい室町時代ぐらいまでさかのぼれるという。14世紀の南北朝の動乱を経たあとと13世紀以前とでは、大きな違いがある。15世紀以降の社会のあり方は、網野の世代の常識である程度理解が可能だが、13世紀以前の問題になると、網野の常識ではおよびもつかない、かなり異質な世界があるように思われるというのだ。

知識について、室町時代にどんな変化が起きていたのか、また今、どんな変化が起きているのか、考えてみるのは面白い。室町時代の変化は、神聖なものから世俗のものへの変化だと言われるが、知識もまた、神にまつわるものから実用的なものに変化したようだ。神仏への祈りや畏れが大きく後退し、結果として朝廷

knowledge3.indd 320 2017/04/07 21:10:05

をはじめとする権威が衰えた時代に、戦後のある時期ぐらいまで生き続けてきた日本の文化の源流といわれる東山文化が生まれた。今の変化がどのようなもので、知識がどう変化し、後世に伝わるどのような文化が生まれているのか。それはもう少しあとになってみないと、わからない。

knowledge3.indd 321 2017/04/07 21:10:05

knowledge3.indd 322 2017/04/07 21:10:05